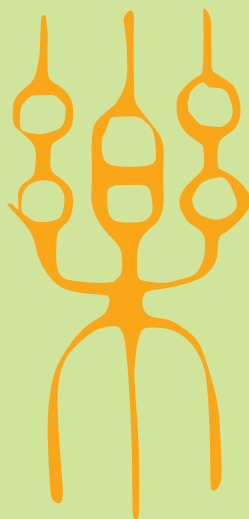


京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報

第7号 2006年3月

ISSN 1346-4590



Newsletter
of the
Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts

No.7 March 2006

目 次

エッセイ

なぞり、魅了、notの不在	藤田 隆則	3
余録 金沢の浦上四番崩れ	後藤 静夫	6

研究短信

SP音盤の調査とデジタル化	亀村 正章	12
電子ネットワークの整備	東 正子	15

センターニュース		17
----------------	--	----

プロジェクト研究・共同研究の報告		23
------------------------	--	----

特別研究員の研究報告		31
------------------	--	----

専任研究員の活動報告		35
------------------	--	----

日本伝統音楽研究センター 概要 2005		47
----------------------------	--	----

Guide to the Research Centre for Japanese Traditional Music, 2005		49
---	--	----

編集後記		53
------------	--	----

エッセイ

なぞり、魅了、not の不在

藤田 隆則

労働分業論について整理する必要があるが、『組織事故』（リーズン著、日科技連）という本を読んだ。発電所の事故や航空機事故等、労働者間の適切な連絡がうまくいかないことから生じる事故について、原因をさまざまに分類し、解決策がしめしてある。

正月、新幹線に乗った。時速300キロで走行する新幹線は、F1と同じ速度なのである。F1は、ひとたび衝突すると、その車体は、クラッシュして、500メートルも前方に吹き飛ばらしい。それを想像すると、新幹線の中でシートベルトもせずに、立って乗っている私は、まるで、飛行機のはねの上に乗っているようなものなのだと思った。私は、そのことにとらわれてしまって、現在も、あまり新幹線に乗りたくないのである。

昨年の秋、包丁で、指の爪を切った。まな板の上で、包丁をつい振り回してしまったのだ。もっと具体的にいえば、いつもなら、左手で、切る材料をきっちりおさえて切るのに、その日は、左手をそえずに、右手だけで、まな板の上に包丁を振り下ろして、千切りをしようとしたのである。何回か包丁が振り下ろされたその下に、左手の人差し指があったというわけだ。包丁の刃は、人差し指の爪に食い込み、爪の一部分がはがれそうにな

った。

その瞬間、血がにじみ出た。爪が三角形に、はがれ落ちようとしている。あわててもとのところに貼付けてみた。そうするとジグソーパズルの一片のように、ひっついておさまった。血はにじみでてくるが痛くはない。止血をする。落ち着きをとりもどすと、じわじわと、血の流れのパルスにあわせて、小さな痛みがじんじんと押し寄せてくる。ああ、ばかなことをしたなあ。

われわれはよく、このような状況で、「魔がさした」という言葉を使うだろう。包丁を片手でまな板に振り下ろして打ち付けるなんて、通常ではありえない。しかしそのとき、私は「魔がさした」という言葉には行き当たらなかった。なぜならば、私は、はやくも止血の最中に、包丁を片手で振り下ろしてしまった原因についての、はっきりとした物語に思い当たったりつあったからだ。

それは、前日に聞いたNHKのラジオ番組だった。たまたま耳にした番組だったのだが、盲人の方が出演しておられた。生活上のあらゆる事を独力で助けもなしに、こなしておられるという話が聞こえてくる。漠然と、しかし、すこしは感心しながら聞いていた。

話が料理のことにおよんだ。アナウンサーが尋ねる。「危なくないですか?」「いいえ大丈夫です。包丁は、基本さえ守れば全然危なくないのですよ。ぜったい怪我はいたしませんよ」。私が即座に思い起こしたラジオの会話と、私の怪我とは、いったいどうつながっているのだろうか。

よくわからない。

次の日、職場の事務室にきた。ぐるぐる巻の指先。どうしたんですか？ 問われるままに、怪我の原因についての解釈をおこなってみた。

前日、盲人が包丁をうまく使っている話をラジオで聞いた。たぶん、私は、その話に影響された。目がみえている（はずの）私は、ましてやそういう危険はあるまいと、油断をしてしまった、と解釈してみたのである。しかしこの、自分と他者との比較にもとづく油断の発生という物語は、してはみたものの、どうも私自身、納得が行かない。

数日後、研究室のバイト二人に、またまた指どうしたんですか、と尋ねられたので、私はもう一度、別の解釈を試してみた。

私は、ラジオの番組を聞きながら、包丁の危険な使い方にとらわれてしまっていたのではないか。ラジオを聞いていた私には次のような、包丁使いの基本についての命題が生まれていたのである。「包丁を片手で振り回してはあぶないですよ。この命題文そのものが、怪我を直接導いているのではないか？

上の命題文は、もちろん主部と述部からなる。形式的に書くと、「何何することは、危険である」「何何することは、許されていない」のような型に収まる文である。あるいはもっとパラフレーズして、「何何すること、いけない!」「何何すること、No!」と置き換えてもよいだろう。

これだ、と思った。私は、なぜ、包丁を片手で振り下ろしたのか、原因をつき

とめたぞ。つまり、私は、この命題文を、時系列でなぞろうとしていたのではないか。盲人の教えに従って、基本を守ろうとした。基本とはすなわち「包丁を片手で振り下ろすことを、禁じる」という命題である。この命題を主部、述部の順に、なぞろうとした。忠実になぞる過程で、私はつまずき、怪我をしてしまったのである。

二人のバイトのうち、一人は、この解釈をまったくありえないと却下、もう一人は、この説明がありえそうだと言い、親に「さわったら切れるよ」と言われて、ついさわって怪我をしてしまったという、類似の経験を語ってくれたのである。

このとき思い出したのが、昔読んだグレゴリー・ベイトソンの、動物には、notが表現できないということについての所説である。「自分の行動に代わるものとして、動物はそのいわば短縮形であるアイコン的な動作を示してすすむことができるわけだが、この種のコミュニケーションはすべて「肯定的」なものだという点を押えておかななくてはならない。キバをむくことは闘いに言い及ぶことであるが、この場合闘いについて言うことは自動的に闘いを提言することになるのである。単にアイコンを示すだけでは「否定」に言い及ぶことはできない。動物によって「オレハオマエヲ噛マナイ」(“I will not bite you.”)というメッセージをストレートに伝える方法はないのである。(中略)つまり、「噛まない」というメッセージを結論として得るために、その逆である噛み合いの行為が試験的に演じられる」(ペ

イトソン『精神の生態学』思索社)。

それにしても、包丁を片手で振り下ろすということ自体を、なぞらなければならぬとする動因は、いったいどこに由来するのか。

最初に触れた『組織事故』という本には、事故の原因として「魅了問題」(fascination)が紹介されている。たとえば、飛行機のパイロットが、故障して異常をしめす計器にだけ見入ってしまって、それを正常にもどすべく格闘をはじめ。そのうち、他の、正常に作動している計器類が目にはいらなくなって、バランスを失って、失速、墜落するという結果を招く。この現象が「魅了」である。いわゆる蛇に見入られたカエルというやつだ。私は、包丁を片手で振り下ろすということそのものに、魅了されていたのだろうか。

つまらない妄想のような話を書いてしまった。しかし、私はこれを、伝統音楽の話と関係があるのではないかと思って書いているつもりだ。

もし、「なぞる」ということが、伝統音楽の伝承の中で重要な位置を占めていると考えるのであれば、動物のコミュニケーションに見られる not の不在、そして、大事故を引き起こしかねない「魅了」といったことも、何らかの関係がありそうな気がする。ただし、このテーマは、明快な方向性と答えをだすのにまだ時間がかかる。

余録 金沢の浦上四番崩れ

後藤 静夫

隠れキリシタン、という言葉はご存知と思う。一般的な理解では江戸時代初期（慶長19年）に禁教令が出た後、表面的には仏教徒として生活しながらひそかにキリスト教の信仰を持続したものである。だが厳密に言えば「隠れキリシタン」とは、信教が自由になった現代でもカトリックに復帰せず、江戸時代以来の秘められた信仰を守り通している人たちのことであり、近代カトリックに復帰した人たちは「潜伏キリシタン」と呼び区別するようである。ともあれ寺請け・宗門改めや五人組制度・踏み絵等の幕府の厳しい禁制・監視にも関わらず、キリシタンたちは250年間信仰を守り通した。世界宗教学上の奇跡と言われる。

だが長い潜伏期間中には信仰が露見し信徒の検挙・弾圧の事態も起きた。「崩れ」という。17世紀に豊後崩れ、美濃尾張崩れ等が知られる。18世紀末以降九州では天草で一度（1805年、天草崩れ）、長崎で四度起こった。特に長崎でのそれは浦上村で繰り返されたので、「浦上一番崩れ」から「四番崩れ」と呼ばれている。それぞれ1790年、1842年、1859年、1865年に起こったものである。

このうち天草崩れと浦上の一から三番崩れはいずれも他への波及・拡大を恐れ、幕府は「キリシタン」と称すること

なく「異宗一件」「異法信仰の心得違い」などとし、拷問による牢死者を出した浦上三番崩れ以外は改宗を誓わせて釈放するなどの軽い処分にとどめた。キリシタンに対して幕府が寛大であったのではなく、できる限り他への影響を避け隠蔽しようとするものであった。このあたりになら今も変わらぬ「根性」のようなものが感じられて、苦笑してしまう。

一方、慶応元年に起こった浦上四番崩れは、それまでとはまったく異なる過酷な信仰弾圧となった。経緯を略記する。

1865（慶応元）年、居留外国人のための大浦天主堂が完成。3月17日金曜日浦上の住人が天主堂見物を装って訪れ、フランス人司教プチジャン神父に信仰告白をする。これにより250年に及ぶ厳しい禁教措置に耐えて信仰を堅持した、浦上の隠れ（潜伏）キリシタンの存在が確認された。事実はプチジャン神父により直ちに横浜を経由してパリ・ローマに報告され、各地に衝撃を与えた。神父たちにより勇気と自信を得た信徒たちは2年後死者を自葬し、旦那寺聖徳寺との絶縁を願い出た。長崎奉行所は信徒の代表7名を取り調べ江戸に報告するとともに、庄屋を通じて提出された絶縁希望者の名簿や探索によって信徒の洗い出しを行った。

幕府はキリシタンとして検挙することとし、1867年6月14日（旧暦）未明豪雨について浦上の秘密教会を急襲し、主だった男女信徒68名を検挙した。浦上四番崩れの幕開けである。信徒の検挙と拷問を知った各国領事は、人道に悖る行為

として幕府に激しく抗議したが、幕府の入れるところとはならなかった。厳しい尋問と棄教の強制でほとんどが改宗したが、帰村後多くがキリシタンに復帰した。事態が解決を見ぬうち旧暦10月15日、徳川慶喜は大政を奉還し幕府は崩壊する。旧暦12月9日(西暦1868年1月3日)王政復古が宣され明治の新政が開始された。

新たに着任した長崎鎮撫総督、裁判所総督が最初に手がけたのが浦上キリシタンの処分であった。旧来の邪教観にとらわれていた上、神道国教主義の方針が明らかにされたこともあり、新政府は幕府の方針を踏襲してキリシタン宗門は禁制であるとの高札を出した。長崎では浦上のキリシタンを召喚して改宗の説得を繰り返したが、応ずるものはいなかった。

説得をあきらめた鎮撫総督、裁判所総督らは、「浦上キリシタン3000余人のうち主たるものは斬罪、その余は配流」との案を政府に上申、裁断を求めた。事が重大であるため政府は大阪で御前会議を開催し、結局「3000余人全員名古屋以西10万石以上の諸藩に配分流罪とする」事に決した。これに対しても各国領事団から強い抗議がなされたが政府は断行した。

1868年7月(西暦)第一回として、中心人物114名が萩、津和野、福山に配流された。続いて1870年1月(西暦)第二回として、戸主700名を含む総勢3000名余の浦上キリシタン全員の配流が行われた。名古屋以西の20藩であるが、当初の案とはやや異なり、10万石以下の中小藩にも預けられた。もっとも多いのは金沢

の517人、最も少ないのは高松の51人であり、総数3380人に上った。この後4年間に渡る流罪地での苦難の生活は「旅」と呼ばれ、長く浦上キリシタンの間で語り継がれた。

1871(明治4)年欧米の事情視察・不平等条約改正交渉のため派遣された岩倉使節団も各国で信仰弾圧を非難され、事が国際的な関心事であることを否応なく認識させられた。諸外国の強い抗議や信徒の信仰心の強固さ等に屈した形で、政府もついに1873年禁教令を廃止した。その結果多数が信仰を保持したまま帰郷を許されたが、故郷は荒れ家財も形を留めない有様でさらに新たな困難に直面しなければならなかった。しかしながら信徒たちは、誰はばかることなくオラショを唱えミサに預かることを無常の喜びとして窮乏に耐えた。信徒たちは貧しいなかに力をあわせ、元の庄屋の屋敷を買い取り、苦心の末聖堂を建設した。

この経緯は『浦上四番崩れ - 明治政府のキリシタン弾圧』(片岡弥吉、1963、筑摩書房、グリーンベルトシリーズ24)に拠ったが、私がこの本を手にしたのは発売まもない高校二年生の冬だったと記憶する。歴史好きの高校生として隠れキリシタンという語は知っていたが、「浦上四番崩れ」は馴染みのない単語であった。

一読して形容しようのない驚きに打たれた。信仰心が薄いといわれる日本人が、正当な指導者もなく幕府の厳しい禁教策の下250年にわたって信仰を堅持したことや、新政府になっても続けられた弾圧と棄教の強制の歴史的事実。それにも屈

せず信仰を貫き通し遂に政策の大転換を勝ち取ったことなどを知り、ほとんど信仰とは無縁な私も大げさに言えば信仰とは、あるいは日本人とは何か？という素朴なそして大きな命題を意識せざるを得なかった。

隠れキリシタン関係の書物も探しいくらかは読んだが、大学に進むと京都という土地柄もあり、関心は南蛮美術・痕跡的に残るポルトガルの言語や文物といった南蛮文化に移り、隠れキリシタン・浦上四番崩れは頭の片隅に押しやられた。ただ 20 藩の中で飛びぬけて多い 517 人が配流された金沢という土地は奇妙に心に残った。

文楽協会で文楽の制作に携わるようになり、国立劇場の刺激的な公演の数々にも関心を持ち鑑賞もするようになった（国立劇場は開場後の一定期間、意欲的で刺激的な公演の数々を展開していたことは記憶されるべきであろう）。

1977 年夏、「第四回日本音楽の流れ」公演で、「近世の外来音楽」と銘打って長崎の明清楽と隠れキリシタンのオラショが演奏されることになった。久しぶりによみがえった記憶に突き動かされはしたが、日程の都合で公演を直接聴くことができずプログラムの記事だけを入手した。監修の皆川達夫氏は、「(キリスト教と共にもたらされたヨーロッパ音楽の 15 世紀末頃の演奏実態を知る手がかりは) 唯一... 1605 年(慶長 10 年)長崎で印刷された典礼書<サカラメント提要>... 中のもの(楽譜)である。...グレゴリオ聖歌の

旋律が記譜され、...日本の地でも歌われていたことを証言している。さらにもう一本、細く、しかし強い糸が残されていた。それは九州の西端の生月島の隠れキリシタンたちが歌いついできたオラショ(祈り)である。...そのラテン語の転訛は甚しく、また旋律もきわめて変形してしまっているが、しかしこの旋律の上向・下降の動き、そして有節歌曲形式による旋律反復などに、原聖歌の輪郭を明確にとどめている。」と解説し、また「隠れキリシタンのオラショも、同時代のヨーロッパの聖歌等の調査によってすべてが明白になった。国外史料の調査はおそらく、外来のキリシタン音楽が日本の音楽にどのような影響をもたらしたかという問題にも、将来予期もしないヒントをあたえてくれるのではないかと...。」との指摘もしておられる(国立劇場第四回日本音楽の流れ「近世の外来音楽 長崎の明清楽・隠れキリシタンのオラショ」プログラム 1977 年 7 月 8 ~ 9 日)。ここでの「隠れキリシタン」は、冒頭記した現在もカトリックに復帰することなく従来信仰を守り続けている人々のことである。

幸いなことに日ならずして、テレビ番組「題名のない音楽会」(だったと記憶する)で隠れキリシタンのオラショが取り上げられ、皆川氏が出演・解説をされたのを視聴することができ、上記国立劇場プログラムの説を私なりに確認することができた。そして改めて高校生の頃片岡氏の書に接して抱えた命題を思い出すとともに、日本人の音楽に対する感覚や日本音楽の成立などと言うことにも思いを

馳せることになった。

(西洋音楽の伝来・15世紀末の演奏・崩れや隠れキリシタンのオラショ等については横田庄一郎氏の著書『キリシタンと西洋音楽』(2000 朔北社)に行き届いた記述がある。)

しかし文楽に関わる度合いが高まるにつれ、またまた隠れキリシタンや浦上四番崩れは、頭の片隅に押しやられたままになった。

2001年夏、気の置けぬ友人と金沢への気楽な旅をする機会が出来た。金沢行は約30年ぶりだが、何かそんな感慨とは別に心を泡立てるものがある。やっとそれが四番崩れであることに思い至り、久しぶりに片岡氏の本を書架から引き出し読み返した。最も多くの信徒が配流された地であるが、片岡氏に金沢に関する記述はない。わずかに忠右衛門という信徒が配流先の金沢から脱出し、大浦天主堂の神父の頼みで薩摩の信徒たちを慰問した直話が収録されているのみである。金沢に着き施設調査をお願いしていた駅前の金沢音楽堂を訪ね、県の教育委員会から出向している係員に隠れキリシタンの遺跡がないか尋ねたが、場所もそのような事実もほとんど知らなかった。翌日街歩きの途中で裏町の小さな古書店に立寄ったところ、意外なほど金沢や石川県の郷土史・民俗関係の書が豊富にあり、かなりの時間を費やした。店番は物静かな老女一人、何も購わずに帰るのも気が引けあまりかさばらぬ2,3冊を求めた。

帰宅後隙ひまにそれらに目を通して

たが、『金沢自然公園 卯辰山』(北村魚泡洞、1972、北国出版社)を開いたところ、目次に「切支丹哀話」とある。これはと思ひあわてて読み始めた。案の定浦上キリシタンが配流され収容された事跡が記述されていたのである。新書版でわずかに3ページ半の記事であったが、片岡氏の記録を補完するものであり私の記憶を一気に呼び覚ましてくれた。「...金沢へ到着した彼らを卯辰山へ収容した。...そのうちの湯座屋谷にあった風呂屋の建物に家族を、また機業場跡に戸主の男子を大ぜい押し込めたのである。湯座屋谷は現在のユースホステル付近で、...寒夜のすき間風が容赦なく吹き込んで、...食物は命をつなぐに足るだけの...初まじりのポロポロ飯が黒椀に盛り切り一杯、菜は朝夕塩茄子三切れ、...というありさま。収容所の外側はがんじょうな柵が巡らされて外部と完全に遮断された。...こうした彼らの苦境は明治6年3月まで続いた。...石川県抑留者の内訳は次のとおりである。不改宗帰還 419人、改宗帰還 36人、逃亡 1人、死亡 105人、抑留中の出生児 44人...」

抑留者数は片岡氏の挙げる数より40余人多いが、片岡氏の著書に挙げる数字自体に混乱もあり、また歴史事典類に示される数字も必ずしも同じではない。北村氏の数字は「白華備忘録」なる「このときの記録」を総合したものという(前掲『金沢自然公園 卯辰山』)。「白華備忘録」は教諭師として信徒らに改宗を迫った真宗松任本誓寺の僧・松本白華の手になるものと思われるが、直接ことに関わった

者の備忘録でありまず信頼を置けるものである。ここに挙げられる逃亡者1人は片岡氏の著書に記された忠右衛門と思われる。

この書を買ってすぐに読んでいれば探していた遺跡に辿り着けたであろうと悔やまれたが、ここまで具体的な場所が記されていれば探すのもさほど難しくはなろうと次の機会を待つことにした。

翌年は金沢には行けず2003年冬に再訪した。着いた翌朝朝食もそこそこに卯辰山に向かった。ユースホステルに行き付近の案内板を見るが、湯座屋谷もキリシ

タン殉教者碑も記載がない。ユースホステルの職員は地元の人ではなくわからない。付近の他の案内板を探すがやはりわからない。一寸離れたところでゲートボールを楽しんでいる一団がいた。地元のお年寄りならきっとご存知だろうと訪ねてみるが、キリシタンの碑はやはり誰も知らない、が湯座屋谷は聞いたことがある、という親切な一人と一緒に探してくれた。それでもユースホステルを基点に30分以上もかかって、やっと谷に下りる道を探しあてた。あまり人も訪れないらしい狭い山道が山裾を廻って一寸開けた



長崎キリシタン殉教者碑（金沢市卯辰山） 写真提供：きまっし金沢 清水俊英氏

場所にそれはあった。高さ1メートルほどの逆台形の質素な碑である。カトリックの団体が建てたものであることが記されている。碑文は表に「義のため迫害される人は幸いである。マテオ第5章10節」。裏に「このあたり草深き谷間は、幕末のころ織屋、湯ざやなど在于たるあとにして、悲しき奉教人の歴史を封じたり。時に明治二年。維新のあともなお信教の自由を許されず、長崎浦上なる耶穌教徒多く捕われ、うち五百人ばかり金沢藩にあずけられて囚徒となれり。二年十二月まで百二十四人織屋に入る。明けて三年一月その家族らおよそ四百人湯ざやに入る。吹雪、破屋を揺る。藩すなわち石川舜台、松本白華らに向けて教誨、日を重ぬるも信篤し。ついに衣服を剥ぎ食を絶ち、酷寒の夜にさらして改宗を迫れども、唯々サンタ・マリヤに祈り、ロザリオを繰りて堪えに堪ゆ。星霜四年を閲し、迫害病疾に斃れ、天に召されたるもの百五人に及べり。明治六年春、政府キリシタンの禁制を解く。釈されて浦上に還るもの四百十九人と記されたり。新生の孩児四十四を加う。今そのことごとくパライソに眠り給う。安らかなり。明治百年というに当り、その篤信忍苦の生涯を後の世に残さんことを願い、碑を建ててこれを鏤す。題字徳田与吉郎。碑文チプリアノ・ポンタツキヨ。一九六八・八・一一」とある。

辺りは北に向かって開ける谷、北国特有の湿った寒さが足元から這い登ってくる。故郷から引き離され政府が相手のいつ終るともない絶望的な虜囚の身。この

地に立ってそれが実感できたような気がした。高校生の単純な驚きから始まった隠れキリシタン・浦上四番崩れの私の「旅」が、ひとつの区切りを迎えたと感じた。

2005年秋20数年ぶりに長崎を訪れる機会があった。大浦天主堂のファサードを見上げながら、浦上の信徒の苦難に満ちた「旅」がここから始まった事を改めて心に刻み込んだ。

現在ではインターネットの金沢観光情報の卯辰山のマップにも、「長崎キリシタン殉教者碑」の表示がされている。

もし記録として記すだけならば、北村氏の書などによって「金沢に配流された浦上の信徒が収容されたのは卯辰山の湯座屋谷であった」と書けばよいのかもしれない。だが自らその地に立つことで実感でき、歴史の事実や人物にもう半歩近づくとすることはあるだろう。あるいはまた、このような些末な事どもも意外日本や日本人を考える上で意外なヒントを与えてくれるのかも知れない、とも思う。

日本の音楽や歴史のあれこれを調べる過程でたまたまめぐり合った、か細い枝葉のような、しかしながら私にとっては忘れたい事どもを書き流しただけのもの。余録、と題した所以である。

研究短信

SP 音盤の調査とデジタル化

亀村 正章

私の研究は、日本伝統音楽研究センター所蔵の音盤に関する資料の整理及び調査、音源のデジタル化による保存と、その利用を目的とするものである（平成 16 年～17 年度の共同研究および委託研究）。

研究の対象となる音の資料は、音楽学者田邊尚雄・秀雄両氏（以下、敬称略）が収集された SP レコードの内、当センターに寄贈された資料である。これらを整理し、内容を調査、回転数の確認や調整をしながら再生し、DAT によりデジタル化。さらに CD に移し替える。そうすれば、センター内外での研究活用が容易になり、また、貴重な演奏を鑑賞するなど、より一般的な公開への道も開けてくる。

研究作業は、登録順の音盤を一枚一枚、丁寧に洗浄することから始まった。50 年以上の保管で溜まったゴミやかびを取り除き、仕上げると、懐かしいラベル、黒光りする SP レコードが蘇ってきた。全部で 700 枚程ある。

次は整理の段階であるが、今後当センターへの収蔵が増える事も

想定して、発売元のレコード会社別に整理し、アイウエオ順で分類。そのレコードラベルは 38 種。多い順に、コロムビア 179 枚、キング 101 枚、ビクター 89 枚、ニッポノホン 63 枚、ニッソー 47 枚。ニッポノホンとニッソーは、大正時代のアコースティック吹込み盤である。全体の中でアコースティック盤は 30 % を占める。

次に、音盤の内容の分類である。音楽の種目分類と面数を多い順に記すと、長唄 378、民謡 254、地歌 122、雅楽 87、浄瑠璃（常磐津 74、清元 61、義太夫 43、新内 40、その他 67）、声明 61、独唱合唱（洋楽）41、歌舞伎 36、端歌 24、尺八 22。

一般のコレクターと異なるのは、民謡が特に多いのと、雅楽、声明など仏教音楽が多く集められている事であろう。音楽学者であり日本の伝統音楽、東洋音楽のルーツに篤く関心を示された、田邊尚雄の人柄を偲ぶ事が出来るようである。



次に、この収集の中核をなす注目すべきラベルを挙げることにする。

【アメリカ・コロムビア】

明治38年、米国コロムビアからの出張録音で吹込まれた、六世芳村伊十郎の「勸進帳」全曲初録音の中、4枚8面がある。明治43年頃輸入された。100年前の勸進帳が聴ける。音もよい。

【古曲保存会】

大正10年、東京で設立された古曲保存会によって完成した「江戸時代音楽レコード」のシリーズで、町田博三（嘉章）が中心になって曲目選曲、演者選定をして江戸時代の音楽を18種類に集約した83枚の大全集。田邊コレクションには34枚68面があり、浄瑠璃系13演目、地歌3演目ほか、名人による名曲が聴けるが、盤面の状態が極めて悪く、ひび割れなど多いため聴きづらいが、出来るだけ影響の少ないように再生した。

【国際文化振興会】

昭和11年、戦時体制の中、外務省関係の発案で「国際文化振興会」(KBS)が作られ、田邊尚雄も参画。この会の最大の事業は、日本の音楽文化を世界にアピールすることであり、日本の音楽全種類の代表的な作品を網羅して音盤化することが決まった。黒田清伯爵を主任、田邊尚雄、颯田琴次、堀内敬三、町田嘉章他を編集委員に、2年余の歳月をかけて、10インチ盤60枚120面に録音し、12枚組5巻を「日本音楽集」として完成。昭和15年発売。その内容は、第1巻 雅楽・仏教楽・声明・和讃・御詠歌、第2巻 能楽・琵琶楽・尺八、第3巻 箏三曲・浄

瑠璃・長唄、第4巻 地唄・荻江・哥澤・小唄・端唄他、第5巻 俚謡。なお、当センターに寄贈された音盤は、第4・5巻の内から7枚が欠落していて、53枚がある。すべて見本盤である。

【ニッポンレコード】

田邊尚雄の笙、平井佐知子の箏・唄により、吉備楽「高砂」が昭和初期の録音で聴くことができる。

【日本民謡レコード】

町田嘉章が採集、編輯した膨大な日本民謡の集大成。全60枚は3輯から成り、全国各地へ円盤式録音機を携えて、地元の民謡、祝唄仕事唄等を現地取材した貴重な音源のレコード化。昭和15年頒布会にて販売。当センターには16枚32面所蔵。

【平安朝音楽】

古曲保存会の事業として、田邊尚雄の監修で製作された「雅楽レコード」。大正10年にアコースティックで録音された画期的な企画で、田邊の献身的な協力をえて録音が完成した。第1類から第7類まであり、全20枚が頒布形式で世に出た。当センターにはレコード20枚40面所蔵される。別途、オープンリールのテープにも未整理の雅楽があり、大正時代に録音された雅楽は、かなりの数になる。

【東洋の音楽】

オーストリアの音楽学者ホルンポステル(1877-1935)が1931年、レコードによる東洋音楽という研究を発表、その付属レコードである。全12枚中11枚が、よい状態で保管されている。収録内容は、日本：長唄「浦島」、端唄「梅にも春」、新

内「関取千両幟」、「松前追分」、その他に支那、ジャワ、バリ、シャム、ペルシヤ、エジプト、チュニスといった諸国の音楽。国により音の差はあるが、非常によい音で採られている。田邊秀雄はこの音盤により、東洋音楽の記録、伝承の必要性を痛感され実行に移された。自ら録音機を携えてアジア諸国を廻り、現地で収録した音楽を昭和59年にまとめて制作したのが「田邊秀雄のアジア音楽の旅」(カセットテープ、非売品として配布)である。

明治の末から、大正、昭和初期までの約50年間に吹き込まれた名人たちの記録は、日本伝統音楽の音の宝庫であり、まさに「音の正倉院御物」とでも言いたくなる。この資料を核として、更に充実した学術的な意義ある音のライブラリーが出来ることを願う。



NIPPON RECORD



コロムビア



音研音盤



古曲保存会



日本民謡レコード



平安朝音楽レコード

電子ネットワークの整備

東 正子

日本伝統音楽研究センターで「情報管理員」という職名で働き始めて足掛け3年が過ぎようとしています。簡単にいうと、「コンピューターまわりのお守り一切合財」をする仕事ですが、ハードウェアの整備からソフトウェアの管理インストール作業、ネットワークの整備や機器の購入相談、そしてホームページの更新作業やデータベースの公開にかかわる作業まで、多岐にわたっています。また、複雑な機器の設定や、頻繁に生じる機器のトラブルへの対応といったメンテナンスによって、日常のさまざまな研究業務をサポートしています。

さて、平成12年に設立された日本伝統音楽研究センターでは、コンピューターによる情報管理や情報提供の重要性を早い段階から認識してきました。現在、他の研究機関と比べて行き届いていない点も多々ありますが、内外の利用者のために、鋭意、ネットワークによる情報公開のための整備を進めているところです。

当センターのウェブ上で皆さんにぜひ試していただきたいのは、「収蔵資料データベース ARTIZE」の検索機能です。たとえば、検索窓に「箏」と入力すると、箏に関わる図書、譜本、楽器、音源、映像など様々な種類の所蔵資料が一括となって表示されます。ワンクリックで、「箏

に関わる総合的な情報」にアクセスすることができるわけです。これは他機関でも例が少ない、当センターの特徴となっています。そのほか、「現代邦楽放送年表」という独自の研究成果に基づくデータベースをはじめ、今後も新しい研究資料の公開を計画していますので、ご期待ください。

日本伝統音楽の研究とコンピューターとの繋がりは遠いように思えますが、そんなことはありません。インターネットによる情報検索はもとより、従来の紙媒体やマイクロフィルムによる研究資料は電子画像や電子テキストに変換が進められていますし、昨今では、日本伝統音楽の音源や映像もコンピューターに取り込んで処理や蓄積を行う機会も多くなりました。それらがネットワーク上で盛んに流通するようになったために、著作権に関わる問題の複雑化といった新たな社会問題も発生していることは周知の通りですが、こうした時代の流れを柔軟に取り入れながら、電子ネットワークの整備をさらに進めるために尽力していきたいと願っています。

『芸大通信』Vol.004(2006年1月)に掲載した「日本伝統音楽研究センターのネットワーク整備」を改題再録した。

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター

Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts

ホーム > データベース > ARTIZE > 検索結果

キーワード検索

検索結果

検索の結果以下の96件の中から検索しました。

- 同種目またはチェックボックスにチェックを入れた同種目または年代を選択し、さらに詳しく資料数が表示されます。
- 各項目の年を選択し検索すると項目内で絞り込みが出来ます。
- 絞り込み条件を絞り込みたい場合は以下の項目を選択し、入力して絞り込み検索を実行して下さい。

所属地 が 指定しない

全て表示 | 20件ずつ表示 | 50件ずつ表示

登録番号 ▼	所属地 ▼	古楽形式	名称 ▼	種別 ▼	所属年代 ▼	制作年代	形式・形式 - 形式番号	製作年	資料数 ▼	画像	詳細
001-05-11-014	伝書	琵琶	東本武代トリコ津巻年し巻 Kobato-shimeji								<input type="checkbox"/>
001-05-17-001	伝書	ハナフ ワクラム	正立別荘会 二十五年新祝賀 祝由書 セイホホウガクサイニシユウ イシユウキニシユウ シウキ のエンクウイ	祝詞 1871年 10月01日			正統-京都祝賀會 司会-北川重徳 キョウトウヨウハクイ キョウトウイ	1871.10	二曲		<input type="checkbox"/>
001-05-17-002	伝書	ハナフ ワクラム	東京音楽学校音楽科音楽実演 会(演習)	祝詞 1871年 10月01日			東京音楽学校 トウキョウモウガク コウガクイ	1871.10	三曲		<input type="checkbox"/>
001-05-17-001	伝書	ハナフ ワクラム	明治音楽学校 演習曲 目 シウキのオノガクツツセ ホニシユウイ	祝詞 1871年 10月01日			明治音楽学校 シウキのオノガク ツツセ	1871.10	二曲		<input type="checkbox"/>
001-05-17-005	伝書	ハナフ ワクラム	第五十二回 演習曲 目 イシジシユウニシユウキョ ウオシシユウイ	祝詞 1871年 10月01日			演習曲 イシジシユウ ニシユウキョウ	1871.10	二曲		<input type="checkbox"/>
001-05-17-006	伝書	ハナフ ワクラム	京下製所 新作曲集 華園 楽道会音楽実演会曲目	祝詞 1871年 10月01日			京下製所 町 会-京下製所 シウキイシシユウ ツツセ	1871.10	三曲		<input type="checkbox"/>
001-05-17-003	伝書	ハナフ ワクラム	明治第二十周年記念 華園 楽道会演習 (明治十七回)	祝詞 1871年 10月01日			華園楽道會 イシユウイ	1871.10	三曲		<input type="checkbox"/>

収録資料データベース ARTIZE キーワード「箏」(画像あり)による検索例

センターニュース

(平成17年度)

人事・採用及び異動発令

平成17年4月1日

助教授 藤田隆則(新規採用)

非常勤講師(特別研究員) 小野真
(新規採用)

非常勤講師(特別研究員) 廣井榮子
(継続採用)

非常勤講師(特別研究員) 三木俊治
(継続採用)

非常勤講師(特別研究員) 森田柗山
(継続採用)

非常勤講師(情報管理員) 東正子
(継続採用)

学芸員 川和田晶子(継続採用)

研究補助員 池内美絵(新規採用)

研究補助員 伊藤志野(継続採用)

研究補助員 齊藤尚(新規採用)

事務長 加納則章(転入)

平成18年3月31日

所長 吉川周平(任期満了、再任予定)
非常勤講師(特別研究員) 廣井榮子
(任期満了)

非常勤講師(特別研究員) 三木俊治
(任期満了)

非常勤講師(特別研究員) 森田柗山
(任期満了)

学芸員 川和田晶子(退職)

研究補助員 伊藤志野(退職)

事務室課長補佐 青木静夫(退職)

客員研究員の受け入れ

客員研究員 Dr. Philip Flavin(カリフ

ォルニア大学パークリー校 ポストドクター)の受け入れが、平成17年5月31日に期間満了した。フレイヴィン氏は、日本学術振興会外国人特別研究員制度により、平成15年度よりネルソン研究室に、16年度より久保田研究室に受け入れられていた。研究テーマは、「江戸期の当道に所属する音楽家の身分と、地歌作物における諧謔性との関係についての歴史的・社会的研究」。

出版物

<学術刊行物>

『日本伝統音楽研究』第3号 日本伝統音楽研究センター研究紀要

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2006年3月31日、B5 2段縦組・1段横組 116pp.

内容： 論文 田井竜一「桂地蔵前六斎念仏 その特質と伝承をめぐって」、藤田隆則「能の地拍子『工学』その系譜と思想」

研究ノート 小野真「法会・神事の宗教性を考察する視点」、竹内有一「初世文字太夫正本の刊行と曲節譜」、告井幸男「名器に名付けられた人物について 玄上・為堯」

調査報告 田井竜一・増田雄「京都祇園祭り 北観音山の囃子」

『都市の祭礼 山・鉾・屋台と囃子』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究叢書1

植木行宣・田井竜一編、岩田書院発行、2005年6月、A5縦組 472pp.

内容： 第一部「はやすもの」と「はやされるもの」 植木行宣「山・鉾・

屋台の祭りやハヤシの展開」、樋口昭「拍子物とその音楽」

第二部「祇園囃子」と「江戸祭り囃子」<「祇園囃子」をめぐる> 田井竜一・増田雄「『祇園囃子』の系譜序論」、増田雄「上野天神祭りの囃子」

<「江戸祭り囃子」の展開> 入江宣子「江戸祭り囃子とその周辺」、坂本行広「佐原の山車祭りと囃子 伝承者の視点から」、米田実「郷祭りとしての曳山祭礼 近江水口曳山祭りと日野曳山祭りを事例として」、田井竜一「水口曳山囃子の成立と展開」

第三部 地域的な多様性 垣東敏博「若狭小浜の祭礼と山車の変遷」、入江宣子「若狭の祭礼囃子の系譜(続)

小浜放生会と高浜七年祭」、大本敬久「四国の祭礼山車 愛媛県を中心に」、岩井正浩「徳島県南部の練り風流 海部郡穴喰町八坂神社の祇園祭りを中心に」、福原敏男「福山の左義長ととんど音頭」、永原恵三「祭礼と観光のダイナミズム 鹿角市の花輪ばやしを例として」

(平成12年度共同研究「山車囃子の諸相」、平成13・14年度共同研究「ダシの祭りや囃子の諸相」の成果)

『日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化 平成16・17年度共同研究資料集』日本伝統音楽資料集成第6巻

編集代表者：久保田敏子、2006年3月31日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、A4 横書き 178pp.

内容：(1)研究の動機と目的、(2)研究調査協力先、金沢蓄音機館、

(財)ビクター伝統文化振興財団(現(財)日本伝統文化振興財団)、ビクターレコードにおける『歴史的音源』の収集・整理と公開に向けての取組(黒河内茂) 国立劇場(独立行政法人日本芸術文化振興会)、国立文楽劇場(同上)、(財)民俗芸術研究所、国立民族学博物館、(3)個人収集家、(4)研究会の成果、SPレコードの再生について(森川司)、(5)田邊尚雄・秀雄氏旧蔵歴史的音盤のCD化(亀村正章)、田邊尚雄・秀雄氏旧蔵歴史的音盤レコード会社別一覧、同カテゴリ別一覧、(6)相愛大学蔵未整理SPレコードのCD化音源一覧(川向勝祥)

(平成16・17年度の共同研究「日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化」、平成16・17年度の委託研究の成果)

『田邊尚雄・秀雄寄贈 楽器コレクション図録』

編集代表者：久保田敏子、2006年3月31日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、A4 横書き 160pp.

内容：発刊にあたって、楽器名称等について、図録、三木俊治「田邊尚雄・秀雄の足跡と楽器群」、個別楽器のデータ、分類凡例。(平成16・17年度、三木俊治特別研究員「日本伝統音楽研究センターにおける田邊コレクション楽器の研究」の成果)

<広報誌等>

『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 所報』第7号、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編

集・発行、2006年3月31日、A5 52pp.
『京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要 2005』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、B4 変形観音折（所報第7号の巻末に書式を改めて再録）

Research Centre for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts, 2005（上記概要の英語版）京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、B4 変形観音折（所報7号の巻末に書式を改めて再録）

東正子「日本伝統音楽研究センターのネットワーク整備」『芸大通信』Vol.004、京都市立芸術大学全学広報委員会発行、2006年1月、p.5

一般公開事業

< 公開講座 >

平成17年度第1回公開講座

「祇園囃子の世界」

日時：平成17年5月14日（土）午後2時～4時

場所：京都芸術センター フリースペース

解説・司会：田井竜一

お話：木村幾次郎氏（長刀鉾祇園囃子

保存会事務局長）

実演：長刀鉾 祇園囃子保存会（鉦6 + 太鼓2 + 笛7 = 15名）

共催：京都芸術センター

受講料無料、受講者数320人

主旨：祇園祭における囃子の響きは、京都市民にとって、夏の訪れを感じさせる身近な存在となっている。しかし、囃子の曲目の違いやその構造、楽器とその奏法などの詳しい事柄については、今まで、ほとんど知られていなかった。この講座では、実際の担い手の方々を招いて、詳しい説明やデモンストレーションを交えながら、その魅力や本質に迫った。そのことにより、受講者に祇園囃子への一層の関心や理解を持っていただくことを目的とした。

内容：1. 本センター所長挨拶

2. 解説「祇園囃子の特質」 田井

3. 実演1：獅子 ~ 上げ ~ 九段 ~ 古

4. 対談形式による解説（デモンストレーションをふくむ）木村氏 + 田井

5. 実演2：通し演奏（唐子 ~ 唐子流し ~ 上げ ~ 兔 ~ 兔の流し ~ 上げ ~ 御袂 ~ 御袂の流し ~ 上げ ~ 緑 ~





流し ~ 上げ ~ 太郎)

6. アンコール： 日和神楽

7. 締めくくり

配布資料：解説レジュメ、譜（ 緑 ・ 「流しの笛」）

反響：一般参加者に対してのアンケートによると、「日頃なげなくきいている 祇園囃子の仕組みや伝承のあり方が良くわかって楽しかった」、「いろいろと説明をきいた後で実演をきいたので、今までとは違った聴き方ができた」といった意見が多く、非常に好評であった。また、こうした形式によって、今後も京都の諸芸能を紹介してほしいという要望が多数寄せられた。

今後も、京都芸術センターと共催で、今回のような担い手に話をじっくりとききながらすすめるレクチャー・デモンストレーションの形式で、京都の民俗芸能を紹介するシリーズを実施できれば、とかがんがえている。

平成 17 年度第 2 回公開講座

「京都で考える江戸の歌舞伎舞踊の動作と美学 歌舞伎舞踊と盆踊りの核になる動作をめぐる」

日時：平成 17 年 6 月 18 日（土）午後 2 時 ~ 4 時 15 分

場所：池坊短期大学 こころホール

講演：吉川周平

対談：志賀山葵・吉川周平

実演：志賀山葵・志賀山勢州・志賀山和萌・志賀山千尋・河本紅葉・鈴木千早也

協力：坂東鼓登治

共催：民族藝術学会

受講料無料、資料代 500 円（希望者のみ）受講者数 200 人

主旨：日本の伝統舞踊には、舞と踊りの 2 種類がある。舞は「まふ」を語源とし、回る動作を核とする。一方、踊りは語源も核になる動作も不明であった。しかし、盆踊りの「オドリ」の動作の核をなす、同じ足を 2 度続けて動かすボンアシの動作と比較することにより、かぶきおどりと言われた歌舞伎舞踊における「オドリ」の核動作が、同様に同じ足を 2 度続けて動かすオスベリだとわかった。

最古の歌舞伎舞踊の流派である志賀山流の特色を「文がやりたや」と「馬場先踊」で示し、男のオスベリのさまを「浦島」と「加賀屋狂乱」で、オスベリ多用の状態を「浅妻船」と「娘道成寺」（羯鼓の部分）の抜粋で示した。また「娘道成寺」（梅とさんさんの部分）を、立合の形式で坂東流の振りと同時に展示した。最後に「綱は上意」の実演によって、舞とは異なる江戸で発達した歌舞伎舞踊を京都で味わい、その動作の特色と美学を考察した。

内容：レクチャー・デモンストレーション

1. 講演：吉川周平「盆踊りと歌舞伎舞踊における「オドリ」の核動作」(付ビデオ上映)
2. 対談：志賀山葵(歌舞伎舞踊志賀山流舞踊家)吉川周平「歌舞伎舞踊の<オドリ>の動作と美学」(付実演)
3. 実演：志賀山流舞踊「綱は上意」志賀山葵

**平成 17 年度第 3 回公開講座
「知られざる中尾都山の魅力(その2)
尺八の指導法と合奏法 尺八吹奏に挑戦」**

日時：平成 17 年 11 月 30 日(水)午後
2 時 40 分～ 5 時

場所：京都市立芸術大学講堂

司会・レクチャ：久保田敏子

講師・指導・実演：森田柁山(日本伝統音楽研究センター特別研究員・尺八演奏家)

助演：菊信木恵美(地歌箏曲演奏家・琴友会所属)・菊信木洋子(地歌箏曲演奏家・琴友会所属)

協力：財団法人都山流尺八楽会(楽器貸与・実技指導ボランティア派遣)

受講料無料、受講者数：吹奏

体験者 96 名、聴講のみ 40 名

主旨：平成 17 年が五十回忌の中尾都山(1876～1956)は、作曲家・演奏家としての才能の他に、教授者としての資質にも優れ、新たな指導法を確立して流の組織運営にも手腕を発揮した。昨年度第 3 回公開講座(その 1)は「虚無僧修行時代から都山流本曲の成立」について検証したが、今回は、「合理的な門人の指導

法と三曲合奏における尺八手付」に焦点を当てて検証し、参加者に尺八の吹奏も実際に挑戦してもらった。

内容：

第 1 部 レクチャーコンサート「尺八の変遷と普及」

1. レクチャー「宗教楽器から庶民愛玩楽器への変遷と都山の手腕」
2. 鑑賞(レクチャー付)：三曲合奏「末の契り」松浦検校作曲、二重奏「春の海」宮城道雄作曲、現代邦楽「アキ」廣瀬量平作曲
3. レクチャー「尺八の指導法の合理化と楽譜」
4. 尺八体験講座：(財)都山流尺八楽会の協力を得て、尺八 120 管の貸与と、指導のためのボランティア講師 10 名の派遣を得た。

第 2 部 レクチャーコンサート「三曲合奏における尺八」

1. 三曲合奏について
2. 中尾都山の手付法
3. 手付過程の検証と手付けの実際(実演付)「八重衣」「末の契り」



< 収蔵資料の閲覧提供 >

平成 17 年 4 月より、学術的な調査研究を目的とした外部利用者、学内の教員・院生・学生を主たる対象として、当センター収蔵資料の閲覧提供を始めた。本年度は試行のため、事前申し込みの上、一部資料に限定して提供を行った。平成 18 年度以降の利用についての詳細はセンターホームページに掲載し、問い合わせは事務室で受け付ける。

< 電子メディア・ネットワーク >**収蔵資料データベース「アルタイズ」**

当センターでは、創設期より継続的に、日本伝統音楽に関わる文献・画像・音源・楽器等、さまざまな研究資料の収集・整理・保存を進めている。これら収蔵資料の書誌（テキストデータ）および一部の画像は、PC サーバー上に一連のデータベースとして構築され、随時データの更新作業を行っている。平成 17 年 4 月から、本データベースをインターネット上でも利用できるようにして、収蔵資料情報の一般提供を始めた（本年度は部分的提供）。

インターネット版「現代邦楽放送年表」

長廣比登志「資料『現代邦楽放送年表』 NHK ラジオ番組「現代の日本音楽」放送記録（64.4 ~ 72.3）」『日本伝統音楽研究』第 1 号別冊（2004）を、インターネット上での利用に適したデータベースとして再構成し、平成 17 年 4 月よりインターネットによる一般公開を始めた。

センター公開講座の記録映像等

各種メディアに記録蓄積された、公開講座の映像や音声は、平成 17 年度より、当センター閲覧室での閲覧利用が

可能になった。

委託研究

「田邊尚雄氏旧蔵 SP 音盤の調査とデジタル化」亀村正章

「相愛大学蔵平野健次氏他旧蔵 SP 音盤の整理とデジタル化」川向勝祥

平成 17 年度は、SP 音盤に関する調査研究に力を入れ、資料の収集・整理・保存を積極的に進めるため、上記 2 件の委託研究を行った。デジタル化により収集整理された音源資料は、データベース登録を進めており、順次、資料情報の提供をインターネット上でやっている。さらに、研究用途を主とした視聴提供も視野に、研究成果のより多角的な公開について検討を重ねている。

平成 15 年度に国立音楽大学楽器学資料館に委託された「音楽画像学目録・描き起こし図録のデータベース化」の成果は、CD-ROM に収められ、平成 17 年度より、当センター閲覧室での閲覧と研究目的での試用が可能になった。本成果の利用に関する問い合わせは、センター事務室で受け付ける。

プロジェクト研究・共同研究の報告

(平成17年度)

<プロジェクト研究>

「教育現場と日本音楽」

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：井口はる菜（滋賀大学非常勤講師）伊野義博（新潟大学教授）加藤富美子（東京学芸大学教授・附属幼稚園長）薦田治子（武蔵野音楽大学教授）澤田篤子（洗足学園音楽大学教授）田井竜一、竹内有一、塚原康子（東京芸術大学助教授）月溪恒子（大阪芸術大学教授）永原恵三（お茶の水女子大学教授）樋口昭（創造学園大学教授）藤田隆則、水野信男（兵庫教育大学名誉教授）茂手木潔子（上越教育大学教授）

教育指導要領の改訂などに伴い、現在、小学校、中学校、高等学校の教育現場では、日本音楽の導入に関する様々な試みが行なわれている。そうした中、適切な日本音楽史の概説書がないという声が現場から多くとどいている。一方、大学教育においても、実は状況は同じであるといえよう。

本プロジェクト研究は、こうした教育現場の声に答えるべく、音楽学・音楽教育学の各分野の専門家が共同して、従来の日本音楽に関する概説書を検証し、また現場における取り組みを参照しつつ、教育現場においてどのような内容のものが必要とされるのかをまず検討する。そして、最終的には、最新の研究成果をふまえつつ、現場で使いや

すい内容の概説書を作成し、それを学界から教育現場に発信することを目的とする。

以上の趣旨にしたがって、平成17年度は計6回の研究会を実施した。現在は、新たな概説書の内容について、最終的な検討をおこなっているところである。

「近代日本における音楽・芸能の再検討」

研究代表者：後藤静夫

共同研究員：今田健太郎（日本学術振興会特別研究員）上田学（立命館大学大学院）奥中康人（名古屋芸術大学非常勤講師）竹内有一、土居郁雄（国立文楽劇場）中川桂（大阪大学等非常勤講師）寺田真由美（神戸大学大学院）中嶋謙昌（神戸女子大学非常勤講師・同大学古典芸能研究センター非常勤研究員）畑中小百合（大阪大学大学院文学研究科）廣井榮子（センター特別研究員）古川綾子（大阪府立上方演芸資料館）細田明宏（別府大学食物栄養学部講師）真鍋昌賢（大阪大学文学研究科助手）横田洋（大阪大学大学院）

明治期を迎え社会環境は劇的に変動し、従来の音楽・芸能も否応なしにそれへの対応・変化を迫られることになった。

その一方外国からも様々な音楽・芸能が流入し次第に定着していった。

近代日本においてはこれら近世以前の音楽・芸能と外来のそれらが互いに競い合い影響し合いながら変化し定着していった。その実態を解明する

ことは現在の音楽・芸能を理解する上でも欠くべからざるものであるが、これまでに十分に行われたとは言い難い面がある。また従来研究の対象として取り上げられなかったものもある。

本プロジェクトでは個々のジャンルにとらわれず多角的に再検討することを目指す。

研究会は原則として映像・音源等を用いて研究員の取り組みもうとしている、或いは興味のある研究対象等の紹介を主としたプレゼンテーション一本と、取り組んでいる課題についての研究発表一本とで構成する。

研究会会場は特に記さない限り、本学日本伝統音楽研究センターの合同研究室1または2である。



を中心に、発表：後藤静夫「人形浄瑠璃の大道具 戯曲での位置と人間の関わり方」(後藤の発表のみ国立文楽劇場)

* 第3回研究会

2005・8・26(金) プレゼン：横田洋「水谷八重子の『ハムレット』 越境する女優の身体」、発表：奥中康人「山国隊のドラム奏法：口伝のドラムルーディメンツ」

* 第4回研究会

2005・9・3(土) プレゼン：後藤静夫「文楽三人遣いの操法分析」、発表：今田健太郎「芸能の映像化とその興行の諸相：活動写真における音と映像の関係」

* 第5回研究会

2005・10・29(土) プレゼン：細田明宏「文楽人形カシラにおける「類型」と「典型」」、発表：土居郁雄「落語の穴 聴く落語(言葉)・読む落語」

* 第6回研究会

2005・11・26(土) プレゼン：真鍋昌賢「ニセ者の芸能史試論」、発表：(ゲストスピーカー)澤井万七美「明治末期の琵琶劇 下関「紫潮会」の活動」

* 第7回研究会

* 試行研究会

2005・5・28(土) プレゼンテーション(以下プレゼンと略)：今田健太郎「無声映画の上映における弁士と音楽」、発表：真鍋昌賢「人はいかにして客になるのか 近代芸能史の受容史観についての対話」

* 第1回研究会

2005・7・10(日) プレゼン：上田学「日露戦争期・京都の映画と社会教育」、発表：細田明宏「『絵本太功記』武智光秀の人物像をめぐる 文学研究的「読み」が浄瑠璃にもたらしたものの」

* 第2回研究会

2005・7・23(土) プレゼン：寺田真由美「昭和期の東京における音曲師の活動 柳家紫朝氏に対する聞き取り

2005・12・10(土) プレゼン：今田健太郎「活動写真の伴奏音楽「和洋合奏」の復元と実践、発表：廣井榮子「花街芸能に創出された「異空間」？」

★第8回研究会

2006・1・14(土) プレゼン：細田明宏「北原人形芝居と地獄巡りバスガイドについて」、発表：竹内有一『『かっぱれ』再考 ルーツと伝承の整理を中心に」

<共同研究>

「日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化」

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：亀村正章、川向勝祥、黒河内茂、後藤静夫、田井竜一、竹内有一、中井猛、林喜代弘

この研究会は、現在では入手困難となっている歴史に残る名演や、伝承の途絶えた貴重な作品の音源の所在情報を整理し、可能な限り収集してデータベース化し、今後の研究に資することを目的として、平成16年度に立ち上げた。

日本の音楽研究にとって、こうした資料の把握こそ、急を要する当研究センターの責務であると考え、斯界の専門研究者とともに、近在の篤志家に広く呼びかけ、寄せられたSPやEPレコード、録音テープを整理してCDに移し、データベース化しつつある。同時に、委託研究とも連携して、資料化を進めている。

また、他機関のアーカイブの現状や、資料整理の実態についても調査研究し、金沢蓄音機関国立劇場、国立文楽劇場、

ビクター伝統文化振興財団、に続いて、本年度は秋田県仙北市田沢湖町にある財団法人 民族芸術研究所を訪問した。

此処での調査は、当センターにとって極めて有効で、得るところが大であった。特に、音資料のみならず、映像資料については学ぶところが多く、可能ならば、今後は相互に連携して資料の公開をしたいと考えている。

また、浪曲の古い音源の蒐集家である森川司氏を当日本伝統音楽研究センターに迎え、SPレコードの発売時期や、制作会社による回転数の微妙な違いについての貴重な研究成果を発表して頂き、今後のCD化に際しての重要な示唆を得た。

「祇園囃子の源流に関する研究」

研究代表者：田井竜一（センター助教授・民族音楽学）

共同研究員：安達啓子（日本女子大学教授・美術史）、入江宣子（仁愛女子短期大学非常勤講師・民俗音楽学）、岩井正浩（神戸大学教授・音楽学）、植木行宣（元京都学園大学教授・日本芸能文化史）、垣東敏博（福井県立若狭歴史民俗資料館学芸員・民俗学）、後藤静夫（センター教授・芸能史）、永原恵三（お茶の水女子大学教授・音楽学）、西岡陽子（大阪芸術大学教授・民俗学）、樋口昭（創造学園大学教授・日本音楽史）、福原敏男（日本女子大学教授・歴史民俗学）、増田雄（甲賀市役所市史編纂係嘱託・歴史学）、米田実（甲賀市役所市史編纂係・民俗学）

京都市立芸術大学日本伝統音楽研

究センターで実施された、共同研究「山車囃子の諸相」(2000年度)・「ダシの祭りと囃子の諸相」(2001 - 2002年度)においてつみのこした課題をひきつぎながら、京都の祇園囃子の成立と展開の過程に焦点をあてて設定されたのが、本共同研究である。「風流拍子物」「稚児の羯鼓舞と獅子舞を主体とする山鉦の囃子」「シャギリ」の各諸相を大きな柱として、祇園囃子の源流に関する諸問題について、様々な角度からの考察・議論をおこなっている。

今年度を実施した共同研究会は、以下の通りである(場所は特記しない限り、いずれも京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室2)。

* 第1回研究会

2005年4月24日(日) テーマ「風流拍子物の諸相 その6:三匹獅子舞」(1)入江宣子「関東の三匹獅子舞」(2)樋口昭「行田市長野のささら獅子舞」(3)総合討論

* 第2回研究会

2005年5月21日(土) テーマ「稚児の羯鼓舞と獅子舞の諸相 その1」(1)福原敏男「戦国・織豊期における祇園会の羯鼓舞稚児舞 八撥を中心に」(2)樋口昭「宍喰の祇園祭りおよび南宮神社大祭における羯鼓舞稚児舞と獅子舞」(3)植木行宣「上阿田木の祭りおよび願興寺大祭における羯鼓舞稚児舞と獅子舞」(4)鬼頭秀明(中京大学非常勤講師、ゲストスピーカー)「中京地区の祭礼と羯鼓舞稚児舞」(5)総合討論

オプション企画として、5月20日(金)に奈良県立美術館において、「洛中洛外図帖」・「洛中洛外図屏風」を熟覧

* 第3回研究会

2005年6月25日(土) テーマ「稚児の羯鼓舞と獅子舞の諸相 その2」・「近世初期における『祇園囃子』の生成 その1」(1)藤田隆則(本センター助教授)「クセ舞(クセ)の拍節上の特徴」(2)宮本圭造(大阪学院大学助教授、ゲストスピーカー)「拍子物から山車の囃子へ 山車をなぜ『ダンジリ』と呼ぶか」(3)総合討論

オプション企画として、6月24日(金)に大阪市立美術館において、「洛中洛外図屏風(田万家本)」を、7月20日(水)に出光美術館、7月22日(金)に東京国立博物館において、それぞれ祭礼図を熟覧

* 第4回研究会

2005年9月11日(土) テーマ「シャギリの諸相 その3:歌舞伎におけるシャギリ」(1)土井郁雄氏(国立文楽劇場、ゲストスピーカー)「歌舞伎囃子における『シャギリ』の諸相について 関係者の証言から」(2)総合討論

オプション企画として、9月5日(月)に林原美術館において、「洛中洛外図屏風」を、9月9日(木)に大阪歴史博物館において、「祇園祭礼図屏風」を熟覧

* 第5回研究会

2005年10月15日(土) テーマ:「シャギリの諸相 その4:新瀉の祭礼におけるシャギリ」(1)伊野義博

氏（新潟大学教授、ゲストスピーカー）「新潟の祭礼におけるシャギリ」
(2) 植木行宣・樋口昭「発表に対するコメント」、(3) 総合討論

オプション企画として、10月21日（金）に延命寺（愛知県南知多町）において、「洛中洛外図屏風」を、10月28日（金）に八坂神社において、「洛中洛外図屏風」・「祇園祭礼図巻」を熟覧

* 第6回研究会

2005年11月19日（土）テーマ：
「シャギリの諸相 その5：滋賀県湖北地方におけるシャギリ文化」、発表者：橋本章氏（長浜市立長浜城歴史博物館学芸員、ゲストスピーカー）、コメンテーター：植木行宣・田井竜一・樋口昭

オプション企画として、11月18日（金）に京都府立山城郷土資料館において、「洛中洛外図屏風（真野家本）」を熟覧

* 第7回研究会

2005年12月10日（土）テーマ：
「稚児の鞆鼓舞と獅子舞の諸相 その3」、(1) 植木行宣「中世的山鉦の伝承とはやし」、(2) 山口祇園会・今井祇園会・願興寺大祭・茶碗祭りの映像記録の上映、(3) 総合討論

オプション企画として、12月9日（金）に堺市博物館において、「洛中洛外図屏風」を熟覧

* 第8回研究会

2005年12月21日（水）場所：サントリー美術館収蔵庫（サントリー（株）梓の森工場内）、テーマ：『日吉山王・祇園祭礼図屏風』の諸相、内容：「日吉山王・祇園祭礼図屏風」



第7回研究会参考資料（滋賀県余呉町茶わん祭り）

の熟覧とそれをめぐる総合討論

* 第9回研究会

2006年1月14日（土）テーマ：
「稚児の鞆鼓舞と獅子舞の諸相 その4：森町山名神社天王祭のオマイ」、(1) 波々伯部神社祭礼および国府祭の映像記録上映、(2) 北島恵介氏（森町教育委員会、ゲスト・スピーカー）「山名神社天王祭のオマイについて」、(3) 山名神社天王祭のオマイの映像記録上映、(4) 植木行宣・樋口昭「発表に対するコメント」、(5) 総合討論

オプション企画として、1月13日（金）に岐阜市歴史博物館において、「洛中洛外図屏風」（光明寺蔵）を熟覧

* 第10回研究会

2006年2月4日（土）、テーマ：
「角館祭りの囃子」、発表者：桂博章氏（秋田大学教育文化学部教授、ゲストスピーカー）

* 第11回研究会

2006年3月18日（土）、テーマ：
「蜘蛛舞・つく舞の諸相」、(1) 田井竜一「蜘蛛舞・つく舞の諸相」、(2) 秋田県天王町、千葉県龍ヶ崎市・野

田市・多古町、知多市、長崎市、いわき市における事例の映像記録上映、(3) 植木行宣・福原敏男「発表に対するコメント」、(4) 総合討論

オプション企画として、3月10日(金)に国立歴史民俗博物館において、「洛中洛外図屏風(歴博乙本・D本)」を熟覧

* 第12回研究会

2006年3月25日(土) 場所: 国立歴史民俗博物館会議室、テーマ: 「諸国祇園会の比較」、(1) 福原敏男「諸国祇園会掲鼓稚児舞 八撥をめぐって」、(2) 質疑応答・討論、(3) 企画展「日本の神々と祭り 神社とは何か?」の見学

「詞章本とその出版に関する研究」

研究代表者: 竹内有一

共同研究員: 井口はる菜(滋賀大学非常勤講師)、小野恭靖(大阪教育大学教授)、久保田敏子、後藤静夫、龍城千与枝(早稲田大学大学院博士後期課程)、谷垣内和子(東京芸術大学非常勤講師)、配川美加(東京芸術大学

非常勤講師)、松岡亮(立命館大学COE推進機構客員研究員)、山崎泉(日本大学非常勤講師)、山根陸宏(天理大学附属天理図書館司書)、吉野雪子(国立音楽大学非常勤講師)、渡邊浩子(大阪音楽大学非常勤講師)

詞章本とは、うた本・謡本・稽古本・正本・浄瑠璃本・段物集・丸本など、音楽芸能の詞章を記した資料を、包括的に呼ぶものである。曲節譜が併記されていることが多いので、譜本と称される場合も多い。分野や流派、年代や目的ごとに、多種多様な形態で展開しているが、近世以降は整版印刷によって広く流布したことが最大の特徴であり、音楽芸能とその実演者・受容者にさまざまな影響を及ぼしてきたといえる。

詞章本については各分野で研究が進められ、詞章本を活用した研究成果も少なくないが、諸分野を横断的に概観しながら、詞章本そのものについて、あるいはその出版について包括的に検討された機会は多くないようである。



本研究会では、各専門分野からの報告を軸にしながらも、分野ごとの視座に留まらず、諸分野を横断的に眺めることを第一の目的とし、次のような視点や課題を共通の意識として携えながら、詞章本に関わる基礎的な研究を進めたい。

- ・分野ごとにみられる独自の特色は何か、分野を越えて共通する特色は何か。
- ・出版物としての詞章本の受容とその文化的役割や社会的意義について。
- ・文学・演劇・美術など、関係分野の出版物との関連性について。
- ・版元に関する情報整理（データベース作成に向けた準備）。
- ・写本による流布と刊本による流布、それぞれの特徴と差異について。
- ・曲節譜を記す音楽的資料としての特性や限界について。
- ・詞章本に關係する用語の歴史的用法や用語法の整理。
- ・詞章本の所蔵先や新出資料についての情報交換、所蔵機関への探訪や史料熟覧等。

* 第1回研究会

2005年8月7日(日)13:30-17:00、日本伝統音楽研究センター合同研究室(以下、「合同研究室」と略記)2、テーマ「研究の目的と課題・その1」
① 基調報告「研究会のコンセプト」「詞章本について」「詞章本の出版」(竹内有一)
② 各論報告「研究の課題と展望 地歌・箏曲・江戸長唄・古曲・義太夫節」(井口はる菜・山根陸宏・久保田敏子・山崎泉・配川美加・吉野雪子・後藤静夫)
③ 全体討論

* 第2回研究会

2005年9月4日(日)13:30 - 17:00、合同研究室2、テーマ「研究の目的と課題・その2」
① 各論報告「研究の課題と展望 歌舞伎・浮世絵・豊後系浄瑠璃」(松岡亮・龍城千与枝・渡邊浩子・竹内有一)
② 全体討論

* 第3回研究会

2005年11月23日(祝)12:45 - 17:00、合同研究室2、テーマ「資料の収集・保存・公開 その1」
① 上方の詞章本出版 その1」
① 講演：竹内道敬(元国立音楽大学教授、ゲストスピーカー)「竹内文庫について」
② 研究発表：竹内道敬「上方の正本について」
③ 全体討論

* 第4回研究会

2006年1月28日(土)13:00 - 17:00、合同研究室2・資料室、テーマ「上方の詞章本出版 その2」
① 研究発表：山崎泉「吉野屋勤兵衛について」
② 全体討論、コメンテーター：吉野雪子

* 第5回研究会

2006年2月12日(日)13:00 - 17:00、合同研究室2、テーマ「上方の詞章本出版 その3」
① 講演：荻田清「上方はやり歌の史料について」
② 全体討論

* 第6回研究会

2006年2月27日(月)13:30 - 17:30、天理大学附属天理図書館、テーマ「資料の収集・保存・公開 その2」
① 展覧見学「日本の古印刷」
「教祖120年祭記念展 特別展示：古文書と古記録」
② 報告：山根陸宏「天理図書館所蔵の音楽芸能資料について」
③ 全体討論

(平成16年度補遺)

「民俗芸能における神楽の諸相」

研究代表者：吉川周平

共同研究員：植木行宣（元京都学園大学教授）、梅野光興（高知県立歴史民俗資料館主任学芸員）、片岡康子（お茶の水女子大学教授）、門屋光昭（盛岡大学文学部長）、小島美子（国立歴史民俗博物館名誉教授）、茂木栄（国学院大学助教授）、星野紘（元東京国立文化財研究所芸能部長）、松永建（元九州芸術工科大学教授）、松原武実（鹿児島国際大学短期大学部教授）、三村泰臣（広島工業大学助教授）、宮田繁幸（東京国立文化財研究所芸能部民俗芸能室長）、渡辺伸夫（昭和女子大学教授）

民俗芸能として伝承されている神楽は、文献資料とは異なり、文字通り具体的な資料であり、それを組み立てている、言葉・音楽・舞踊などの要素が、どのようなかたちであるかを提示してくれている。しかし、神楽は行われる時期が限られているばかりではなく、ひとつの神楽を見るのも容易ではない。また式年といって毎年ではなく、7年に1度とか、25年に1度とかいうような奉納法もあり、1人の研究者が網羅的に見ることは不可能である。

そのため本プロジェクト研究は、ビデオ撮影をしている研究者が、その映像資料を持ち寄って、地域ごとの神楽の実態を確認しあう作業を進めてきた。神楽は日本の神観念や具体的な神の表

現、神まつりの構造を考察するうえで、もっとも重要な芸能なので、慎重に検討することが必要であるが、平成15年度の研究をうけて、第2年度の平成16年度には、以下のような研究会を、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1で行った。

*第1回研究会

2005年1月7日（金）・8日（土）・9日（日）、（1）吉川周平「神楽・神舞・ユタの神まつりにおける神出現の表現に見られる身体動作」、（2）三村泰臣「周防の神舞」、（3）松原武実「滅びゆくノ口祭祀」、（4）梅野光興「高知の神楽」、（5）門屋光昭「東北地方の神楽 和賀大乘神楽等をめぐって」、（6）討論、司会・進行：吉川周平

*第2回研究会

2005年3月19日（土）・20日（日）、（1）久保田裕道（民俗芸能研究家、ゲストスピーカー）「三信遠の湯立ての神楽をめぐって」、（2）門屋光昭「東北地方の神楽 巫女舞等をめぐって」、（3）三村泰臣「日本と中国の浄土神楽」、（4）討論、司会・進行：吉川周平

*第3回研究会

2005年3月29日（土）・30日（日）、（1）高山茂（日本大学教授、ゲストスピーカー）「秋田の番楽をめぐって」、（2）茂木栄「村の年間行事と神楽 子供の成長儀礼をめぐって」、（3）星野紘「変な踊りのステップ」、（4）討論、司会・進行：吉川周平

特別研究員の研究報告

(平成17年度)

小野 真

「法会の宗教性 仏教的ヒエロファニーの探究」

日本の伝統芸能は、法会や神事といった宗教的行事を構成するものとして発展してきた。法会や神事においては、個別の伝統芸能は、宗教的儀礼やその宗教的に荘厳された宗教的空間とあいまって、全体として一つの有機的な宗教性を現出させている。伝統芸能を個別に研究したり、文献に即して研究することはもちろん重要なことであるが、それら伝統芸能が他の要素とあいまって、法会や神事において現出させる宗教性をいかにとらえるか、またいかに語るかという探求も、伝統芸能の本質を捉えるうえで必要な作業であると考ええる。

さて、探求に際しては、この宗教性を「宗教性」そのものとしていかに考察するか、すなわち法会や神事における無限・超越的要素にどのようにアプローチすべきか、ということがまず問題となる。さらに、「日本」の法会・神事である以上、欧米の宗教儀礼についての理論をそのままには援用できない。したがって同じ関心を持つ日本の先行研究をまず吟味して、探求の端著を見出すことが今年度の課題となる。さしあたり、筆者の専門領域である宗教学に関連する分野から、その端著を探求した。その成果は、当センター紀要『日本伝統音楽研究』3(2006年3月刊)において、「研究ノート」として発表した。以下に、簡単にその要点を述べる。

元来、宗教現象の本質を語ることは宗教哲学的な営みになるが、同時に民間信仰研究のアプローチの視点も必要になる。西洋においてはエリアーデのような立場があるが、東洋的な感性をふまえた研究として、岩田慶治の「カミ」の概念の研究があげられる。岩田が語る「カミ」は、制度化・固定化される以前のアニミズム的な、「イノチに対する原初的な驚きであり、共振であり、畏敬の念」である。ただ、岩田の立場は宗教的感性の主観的側面が強調されすぎているように思われる。この点、梅原賢一郎がやはり岩田のコンセプトにインスパイアされて、構築した「人と神のコミュニケーションの形式」としての「穴」のコンセプトをたたき台とすることができる。「穴」はイノチに対する共振を保ちつつ、具体的な身体的動作に即して、法会や神事で現出している宗教性を語ろうとするものであり、「穴」はいくつかの身体動作によって類型化される。筆者は、試みに四天王寺聖霊会を「穴」の類型の集合体としての説明を試み、梅原があげる類型以外の「穴」の形態を提唱し、また「穴」のコンセプトがさらなる宗教哲学的な理論的基礎付けの必要性を指摘する。

研究テーマに関連する著作

* Die Gagaku-Musik und der Buddhismus,
in: EKO-Blatter, Heft 21 Herbst 2005

研究テーマに関連する講演と演奏

* 2005.7.4 「中央の舞楽と地方の舞楽
～大阪天王寺舞楽と遠江小国神社・能生白山神社の太平楽(泰平楽)を比較して～」(伊野義博新潟大学教授と共同発表) 津村別院

* 2005.10.16 「異文化における雅楽の響き～天王寺舞楽海外公演の歴史か

ら」、四天王寺

主な演奏活動

- * 2005.4.22 四天王寺聖霊会舞樂法要、舞樂「央宮樂」「太平樂」
- * 2005.10.22 四天王寺経供養舞樂、太鼓
- * 2005.11.17 第39回雅樂公演会（フェスティバルホール）、管絃「楽箏主絃」・舞樂「賀殿」
- * 2005.11.20-12.1 ポーランド・チェコ海外演奏 舞樂法会（天台、真言声明とともに）：龍笛、於ワルシャワ・クラコフ / 石井真木作曲「声明交響」：龍笛主管、於ブラハ城スペインの間（チェコ大統領臨席）

廣井榮子

「豊竹呂昇研究 音楽活動における『結節点』としての演奏会とレコード」

平成17年度は、全国規模で活動を展開した娘義太夫豊竹呂昇の実像に迫るために、SPレコードと演奏会という二つの方向からの資料収集をはかり、一部をデータ化した。

近年のCD復刻事業によって黎明期のSPレコードが注目されつつあるが、ジャンルごとのSPレコードが整備されたり、それに基づく研究の蓄積がなされてきたかということ、追隨する動きが伴わないというのが現状である。音源そのものは、歌詞の異同、演奏スタイルの変遷、レコードの編集方針（短時間録音のための省略のしかた）がうつしこまれ、さらにはレコード制作者の意図や録音技術の問題、録音にのぞんだ演奏家の姿勢までがつぶさに伝わってくる貴重な資料といえる。ところが、当時のレコードには発売年などの基本的なデータを記載する習慣なく、

番号付けなどにも統一がないために、文献などに比べると資料的価値が低く、ただ珍奇なだけの音のサンプルと見なされてきた。

そこで、これまでに豊竹呂昇が演奏した片面レコードを含む約430面の義太夫節レコード（実売された数はこれよりも多い）の情報を洗い直し、演目ごとの整理と発売年の割り出しという研究を下支えするデータベースづくりに力を注いだ。発売年については、明治・大正・昭和戦前期に発行された新聞・雑誌・月報に基づき既収集のデータに加えるという方向で作業を進めてきた（続行中）。そうすることによって、呂昇という一人の演奏家のレコードにおける演奏史をたどったり、エピソードだけの言説研究ではなくレコードというメディアを加えることによってきちんとした裏付けのある研究が今後出てくることを想定したからである。

今年度のもう一つの収穫は、調査収集した呂昇の演奏記事に未見の演奏会記録が出てきたことである。呂昇が生前に残した芸談やインタビュー記事によれば、彼女の「改良」への意欲は女義をめぐる興行上の問題、女義自身の芸質の向上、既存作品の改良と多岐にわたっていたことが知られているが（拙稿『声』のゆくえ

豊竹呂昇の「十種香の段」レコードについての一考察）、複数の作品においても彼女なりの「改良」運動が展開されていたことが明らかになり、さらにそうした演奏についての批評記事までが掲載されていたことも確認できた。これらについては今後改めてレコードを含めた検証を続けねばならないが、呂昇が複数の作品に対して「改良」を掲げて実践しつづけた事例を見いだしたことは研究の厚み

を増すという点から見ても意義深いものといえる。

研究テーマに関連する講演

* 2005.5.18 「日本音楽 豊竹呂昇のみた『夢』」、神戸婦人大学

三木俊治

「日本伝統音楽研究センターにおける田邊コレクション楽器の研究」

平成17年度は、田邊資料の社会的機能と、楽器データ管理法を研究の主要テーマとした。

田邊資料の社会的機能

同資料を、国内・国外資料、国内では伝統楽器と創作楽器、に大別し、それぞれのカテゴリーで個別楽器の特性を調査し、コレクション全体の現時点での社会的機能を考察した。

(1) 資料の国内的機能

【明治～昭和期の創作楽器のアーカイヴ】

花月ハアプ、福月といった、和洋折衷の理念に基づく創作楽器を複数アーカイヴしている点は、他の博物館に見られない田邊資料の特長である。

創作楽器制作者達の一次情報の分析や、田邊秀雄氏へのインタビューを通じて、これらの楽器の背景、現代的価値を考察した。

【展示会への出品とアジア文化の啓発】

田邊資料が収集当時より果たしてきた、アジア各地の音楽文化の啓発という側面について、公的および民間の展示会での他展示物との比較を通して考察した。

(2) 資料の国際的機能

【アジア各地域の絶滅種のアーカイヴ】

田邊資料に保存されている国内外の楽器のうち、芸能の伝承や製造技法が現存していないもの、一旦途絶したと思われる

ものについて絶滅種、と定義し、特に国外の資料について、アーカイヴの意義を考察した。

この内、インドネシアの資料については、現地調査も実施し、ヌサ・トゥンガラ地域における当該文化の現状と、アーカイヴ状況を確認した。

楽器データ管理法の研究

個別楽器の記述方法・楽器データ管理の手法をテーマに、分析機能別に階層化されたデータベースの設計、振動モードに着目した楽器小分類を考案し、田邊資料をデータとして試行の実効性を検討している。

(1) 楽器データ管理法における試行～管理属性による階層化

従来の楽器データ管理は、楽器属性を記述する際に文化人類学、工学、音響学等の諸学の領域が混同されており、入力、分析時に情報種、精度の基準が統一されていない。今回の試行では、属性別に内部を階層化したデータベースを設計し、情報精度の確保、再検証の容易なデータから記述するという手法を編み出した。田邊資料の管理に実用化しており、効果を検証中である。

(2) 楽器分類法への試行～振動モードを基準とした小分類

同データベース内で使用する分類について、新しい小分類を考案した。楽器の振動モードを主に、共振体構造を従にし、二つを組み合わせることによって分類するもので、比較検討の対象として国内における先行研究を参考にした。

資料の物理的管理の経過

(A) 通年の作業

* 収集者情報の整理とデータベース入力

楽器はある程度整理されたので、楽器

情報を添付書類、各種文献、インタビュー等から比較検討して選び、フォームに入力を開始した。

* 物理量の測定

最終的に楽器のピッチ、波形等の収録をめざしているが、機材の関係で測定は採寸にとどまっている。測定具は、長尺物用など治具をオリジナルで作成した。

* クリーニング

竹製品、金属製品を中心とし、滅菌、NOx・SOxの除去を目的としたクリーニングを実施した。

* 修復の準備

一部資料の修復のため、別途修復用のクリーニングを実施した。

(B) 時期限定的作業

* 楽器の撮影（一方向）

データベース上での楽器と文献資料の一对一対応を確定するための一面図撮影を2005年6～8月に実施し、全303資料について作業を完了した。

* 図録の制作

2005年12月より2006年1月にかけて、撮影データを元にした図録の制作にとりかかり、平成17年度末に発行した。

森田柗山

「中尾都山の地歌尺八手付けの研究」

従来、三曲合奏において尺八は、「三弦の旋律を模奏し、若干の装飾を加えつつ持続音の音色効果を出す」とされてきたが、中尾都山の場合、歌の旋律を意識した手付けもあることを明らかにした。

また、「八重衣」で年代によって異なる手書き譜3種を検証し、後期のは三弦・箏から離れた旋律を用いていること、また、その旋律型を分類し、都山の地歌

尺八手付けの特徴と、地歌に尺八を加える意味を明らかにした。

研究テーマに関する講演と演奏

* 2005.11.30 「知られざる中尾都山の魅力その2・尺八の指導法と合奏法～尺八吹奏に挑戦～」、日本伝統音楽研究センター平成17年度第3回公開講座、京都市立芸術大学講堂

第1部は「尺八の指導法と尺八の普及」。中尾都山は演奏家・作曲家としての才能の他に教授者としての資質にもすぐれ、数多くの門人を育成した。都山の指導法を解説するとともに、受講者（約百名）への尺八体験教室を実施した。また音楽学部学生総合演習として開催し、古典から現代曲までの鑑賞の時間も設定した。第2部は「三曲合奏における尺八」。「末の契」の実演によって、都山の歌を意識した手付けを示した。また、「八重衣」の明治30年頃と大正11年頃の手付けを比較演奏し、都山の地歌尺八手付けの特徴を示した。（所報本号センターニュースに別途報告掲載）

専任研究員の活動報告

平成17年度

(平成16年度補遺を含む)

吉川 周平

著作活動

- * 2005.02.22 「第4回民俗音楽研究会の開催について」、『日本民俗音楽学会会報』22、p.27
- * 2005.03 「盆踊りの場にあふれる若者の性の力」、『舞踊学』27、pp.50-52
- * 2005.03 <所長対談>「中西進先生にきく 万葉、そして日本伝統文化」、中西進との共著、『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所報』6、pp.3-25
- * 2005.03 討論参加、中部高等学術研究所共同研究会『アジアにおける文化クラスター()：時代認識の変容 英雄・カリスマ・アイドル像をめぐって』、p.12、40、54
- * 2005.06 「『都市の祭礼 山・鉾・屋台と囃子』の刊行にあたって」、植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼 山・鉾・屋台と囃子』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究叢書1、東京、岩田書院、pp.1-2
- * 2005.08 「第97回研究例会記録および発表要旨」、『民族芸術学会会報』66、p.7
- * 2005.09.19 <月曜隨想>「瀬戸内の位碑を背負う盆踊り」、『四国新聞』、p.3
- * 2005.10 「日本の伝統舞踊 ピナ・パウシュとの接点」、『恋よりどきどきコンテンポラリーダンスの感覚』、東京、

財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、pp.98-99

- * 2005.10 “Pina Bausch and Japanese Traditional Dance”; Japanese Contemporary Dance Media 2005”, Tokyo, Tokyo Metropolitan Museum of Photography, pp.231-232

公開講座用「資料集」作成

- * 2005.06.18 「京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 平成17年度第2回公開講座：京都で考える江戸の歌舞伎舞踊の動作と美学 歌舞伎舞踊と盆踊りの核になる動作をめぐって」、京都市立芸術大学日本伝統音楽センター、全51頁

口述活動

- * 2005.03.25 研究発表 “Laughter as Symbol of Approval in Japanese Fertility Rites or *Ta-asobi*”, 19th World Congress of the International Association for the History of Religion (第19回国際宗教学宗教史学会世界大会)、東京、高輪プリンスホテル・桜タワー2階
- * 2005.05.22 研究発表「神楽における神霊の視覚化 銀鏡神楽の主目的としての神出現の構造と舞の動作の様式」、第21回民族芸術学会大会、東京、江戸東京博物館
- * 2005.06.18 講演「盆踊りと歌舞伎における<オドリ>の核動作」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成17年度第2回公開講座「京都で考える江戸の歌舞伎舞踊の動作と美学 歌舞伎舞踊と盆踊りの核になる動作をめぐって」(共催：民族芸術学会第97回研究例会)、京都、池坊短期大学ここ

ろホール

- * 2005.06.18 対談「歌舞伎舞踊の〈オドリ〉の動作と美学」(付実演) 共著者: 志賀山葵、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成17年度第2回公開講座「京都で考える江戸の歌舞伎舞踊の動作と美学 歌舞伎舞踊と盆踊りの核になる動作をめぐる」(共催: 民族芸術学会第97回研究例会)、京都、池坊短期大学こころホール
- * 2005.08.27 基調講演「民俗芸能のブロック大会の意義」、第47回近畿・東海・北陸ブロック大会、イベント交流「出演団体意見交換会」、大阪、文楽劇場

プロデュース活動

- * 2005.06.18 企画・講演・対談・司会「京都で考える江戸の歌舞伎舞踊の動作と美学 歌舞伎舞踊と盆踊りの核になる動作をめぐる」、京都市立芸術大学平成17年度第2回公開講座、民族芸術学会第97回研究例会、京都、池坊短期大学こころホール
- * 2005.11.26 演出・舞台監督(共同)「第55回全国民俗芸能大会」、東京、日本青年館

国際会議

- * 2005.03.23-30 19th World Congress of the International Association for the History of Religion (第19回国際宗教学宗教史会議世界大会)、東京、高輪プリンスホテル

調査活動

- * 2005.08.13 愛媛県越智郡岩城村(岩城島)の盆踊りを調査

- * 2005.08.14 広島県豊田郡大崎上島町(大崎上島)の盆踊りを調査
- * 2005.08.15 愛媛県松山市中島町元怒和(怒和島)の盆踊りを調査
- * 2005.09.14 香川県綾歌郡綾南町萱原、および同郡綾上町東分の滝宮の念仏踊りを調査
- * 2005.09.15 香川県綾上町羽床上の滝宮の念仏踊りを調査
- * 2005.09.29 香川県綾上町牛川の滝宮の念仏踊りを調査
- * 2005.09.30 香川県綾上町西分、および同町山田上の滝宮念仏踊りを調査
- * 2005.10.11 香川県綾上町山田下、同県綾南町千疋、および同町羽床下の滝宮の念仏踊りを調査
- * 2005.10.12 香川県綾南町小野、および同町北村の滝宮の念仏踊りを調査
- * 2005.10.18 香川県丸亀市飯山町の坂本念仏踊りを調査

学内活動

- * 評議員、国際交流委員会、国際会議委員会、将来構想委員会、全学広報委員会、自己点検・評価委員会、セクハラ調査委員会、日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考委員会、京都市立芸術大学芸術教育振興協会

対外活動

- * 文化審査会文化財分科会第5専門調査会会長代理・無形民俗文化財委員会委員長
- * 大阪府文化財保護審議会委員
- * 平成17年度第4回ふるさと文化再興事業・大阪府伝統文化総合支援研究委員会委員
- * 第47回近畿・東海・北陸ブロック民俗

芸能大会実行委員会顧問

- * 香川県文化財保護審議会委員
- * 平成17年度ふるさと文化再興事業・伝統文化総合支援研究委員会委員
- * 香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館運営協議会会長
- * 日本歌謡学会評議員
- * 舞踊学会理事
- * 民族芸術学会理事
- * 民俗芸能学会理事

久保田 敏子

著作活動

- * 2005.03.17 エッセイ「パズルのススメ」 / 『現代のことば』、京都新聞
- * 2005.04.05 ~ 楽曲解説<連載>「温故知新〜古曲をたずねて〜」、04.05「出町の柳」、06.05「葵の上」、08.05「秋の言の葉」、12.05「名所土産」、06.02.05「六段の調」 / 『楽報』952〜960号、(財)都山流尺八楽会刊
- * 2005.04.10 論考「近世箏曲の始まりと地歌の発展」 / 『地歌・箏曲の先師たち』、(社)日本三曲協会会報NO.89
- * 2005.05.01 ~ 楽曲解説<連載> 05.01「芥子の花」、07.01「茶音頭」、09.01「秋の言の葉」、11.01「八重衣」、06.01.01「吾妻獅子」、03.01「櫻川」 / 『創明』302〜312号(創明音楽会刊)
- * 2005.05.05 楽曲解説「四季の富士」「秋風の曲」「川千鳥」「出口の柳」「翁」「古道成寺」 / なにわ芸術祭『琴友会』プログラム、サンケイホール
- * 2005.05.15 論考「長谷校校伝その4」 / 『長谷記念邦楽コンクール』本選

プログラム

- * 2005.05.17 エッセイ「竹の秋に想う」 / 『現代のことば』、京都新聞
- * 2005.06.18 楽曲解説「秋韻」「八段恋慕」「四季の眺」「春の夜」「越天楽変奏曲」 / 『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ〜春秋に薫る〜』プログラム、いずみホール
- * 2005.06.19 楽曲解説「春の海」「きぬた」「八重衣」「比良」「道灌」 / 『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ』プログラム、いずみホール
- * 2005.08.11 寄稿「俚奏楽演奏会によせて」 / 『本條秀太郎俚奏楽演奏会』プログラム、国立劇場
- * 2005.08.21 資料「『古今和歌集』と箏曲」 / 京都コンソ - シアム講座
- * 2005.09.15 論考「三味線組歌と箏組歌」 / 『地歌・箏曲の先師たち』、(社)日本三曲協会会報NO.90
- * 2005.10.08 楽曲解説「紅葉」「岩清水」「<竹の四季>より秋」「尾上の松」 / 『藤田天山尺八リサイタル』プログラム、京都府民ホールアルティ
- * 2005.10.21 楽曲解説「冬の曲」「根曳の松」「熊野」 / 『亀山香能リサイタル』プログラム、津田ホール
- * 2005.10.25 楽曲解説「初音の曲」「初若菜」「葵の上」 / 『萩岡松韻りさいたる』プログラム、国立劇場
- * 2005.10.25 楽曲解説「虫の音」「珠取海土」「新青柳」 / 『菊央雄司三絃リサイタル』プログラム、大阪府演芸資料館ワッハホール
- * 2005.11.07 楽曲解説「八島」「石橋」「新青柳」 / 『横山佳世子地歌リサイタル〜序破急を歌う〜』プログラム、大阪能楽会館

- * 2005.11.13 資料 / 『聴かしゃんせ地歌～粹都なにわの庶民の音楽～』、大阪
市立図書館講座
- * 2005.11.18 楽曲解説「弄斎」「御山獅子」「新青柳」「翁」 / 『菊信木恵美・洋子親子ジョイントリサイタル』プログラム、大阪府演芸資料館ワッハホール
- * 2005.11.20 解説「リサイタルに寄せて」 / 『弦歌の世界～馬場尋子箏・三弦リサイタル』プログラム、イシハラホール
- * 2005.12.16 楽曲解説「笹の露」「名所土産」「尾上の松」 / 第六回ビクター邦楽技能者オーディション合格者記念CD『生田流箏曲高橋佳子』、VZCF-1005、日本伝統文化振興財団
- * 2005.12.16 解説「創作上方浄るりについて」「冥途の飛脚」「城山狸」「枕物狂」 / 『創作上方浄るり～中島勝祐作品集(一)～』VZCG-569、日本伝統文化振興財団
- * 2006.1.14 寄稿「没後50年・現代邦楽の父宮城道雄」 / 日経新聞夕刊文化欄
- * 2006.1.14 寄稿「昔語りに聞いた家庭の音曲」 / 『第133回邦楽鑑賞会』プログラム、国立劇場
- * 2006.1.14 解説「箏組歌について」「四季の富士」「扇曲」「宮の鶯」「雪晨」「空蝉」「秋風の曲」 / 『第五回箏組歌演奏会～流派を越えて組歌の魅力を探る～』プログラム、紀尾井ホール
- 口述活動
- * 2005.04.24 楽曲解説「万歳」「みだれ」「船の夢」「ことうた郷愁」「明治松竹梅」「吾妻獅子」「萩の露」「箏17弦五重奏曲」「椿尽」「御山獅子」「つむぎ唄」 / 『当道友楽会第85回定期演奏会』、サンケイホール
- * 2005.04.24 楽曲解説「二重砧」「萌春」「春三題」「春の海幻想」 / 『第8回菊武厚詞リサイタル』、サンケイホール
- * 2005.06.18 解説『宮城道雄をしのぶ』箏の夕べ～春秋に薫る～』、いずみホール
- * 2005.06.25 楽曲解説「菜落」「夕顔」「水鏡」「葵の上」「八重衣」 / 『京の韻 vol.1「こころの彩」』、法然院
- * 2005.07.30 楽曲解説「儘の川」「新道成寺」「梅の宿」「菊の朝」「新浮舟」「御山獅子」「こんかい」「夜々の星」「笹の露」「虫の音」「西行桜」「新青柳」「玉川」「萩の露」「古道成寺」「翁」 / 琴友会『古典を勉強する会』、守口エナジーホール
- * 2005.06.05 楽曲解説「春の海」「平成松竹梅」「さくら三重奏」「さくらさくら」「じょんがら」「箏のしらべ」「編曲松竹梅」 / 『桐韻会25周年箏曲演奏会』、宝塚バガホール
- * 2005.08.21 講演「古今和歌集と箏曲」 / 『プラザカレッジ京都学講座2005「和歌～ひとのこころをたねとして～」』(『古今和歌集』編纂1100年・『新古今和歌集』編纂800年記念)、大学コンソーシアム
- * 2005.09.11 楽曲解説「八千代獅子」「難波獅子」「松の壽」「嵯峨の秋」「四段砧」「千代の鶯」「石橋」「老の友」「笹の露」「浜千鳥」 / 『第16回祥門会地歌箏曲演奏会』、国立文楽劇場
- * 2005.11.11 楽曲解説「やなぎやなぎ」「蘆刈」「百歳の恋」「ぐち」 / 『竹内駒香師を偲ぶ会』、玉水記念館大ホール

- * 2005.11.12 楽曲解説「編曲八千代獅子」「春と花の幻想曲」「儘の川」「かぐや姫の帰還」「樹冠」「笹の露」「ディヴェルティメント」/『菊井奏楽社第36回定期演奏会』、大阪厚生年金会館芸術ホール
- * 2005.11.13 レクチャー「大阪地歌」「中島」「鶴の声」「ワンワンニャオニャオ」「手鞠」「難波獅子」「浪花十二月」/市民講座『聴かしゃんせ地歌～粹都なにわの庶民の音楽～』、大阪市立図書館
- * 2005.11.22 報告とパネルディスカッション「地歌」について/シンポジウム『日本伝統音楽を語る』伝統文化芸術総合研究プロジェクト、国際日本文化研究センター
- * 2005.11.30 レクチャー「知られざる中尾都山の魅力～その2～」/『京都芸術大学日本伝統音楽研究センター第3回公開講座』、京都市立芸術大学講堂
- * 2005.12.10 楽曲解説「楽」「吉越」「紫苑」「スペイン風即興曲」「春の海」/『金久千賀子箏曲リサイタル』、池坊こころホール
- * 2006.01.16 & 23 講義「尺八と三曲合奏」/『音楽科公開講座』、大阪府立夕陽丘高等学校ピオラホール

調査活動 多数につき省略

学会活動

- * 社団法人東洋音楽学会 副会長・機関誌編集委員長
- * 日本歌謡学会 評議員
- * 日本民俗音楽学会 会員
- * 日本音楽学会 会員
- * 楽劇学会 会員

学内活動

- * 評議員、国際交流委員会、国際会議委員会、附属図書館運営委員会、将来構想委員会、自己点検・評価委員会、京都市立芸術大学芸術教育振興協会

対外活動

- * 京都コンサートホール運営委員、京都の秋音楽祭実行委員、京都市奨励新人審査委員、京都創生百人委員会委員、京都市芸術センター運営委員、京都府古典芸能振興公演補助金審査委員、奈良秋篠音楽堂企画運営委員、大阪21世紀協会企画運営委員、大阪市文化財課地歌調査委員会委員、文楽劇場短期公演運営委員、文化庁文化審議会第四部門専門委員、NPO法人「日本の音振興普及協会 楽音会 副理事長、NPO法人「奈良芸能文化協会」理事、ザ・フェニックスホール「エヴォリューション・プログラム」選考委員、ポーラ伝統文化振興財団選考委員、日本伝統文化振興財団ピクチャー邦楽技能者オーディション選考委員、日本尺八連盟審査員、熊本お城まつり長谷記念邦楽コンクール審査委員

後藤 静夫

著作活動

- * 2005.05.01 「初心者のための伝統芸能講座・文楽」、『なごみ』5月号、pp.86-92
- * 2005.06.10 連載「鑑賞力アップ講座・文楽を楽しむ その3 心をひとつにして完成させる美」、『上方芸能』

156号、pp.106-109

- * 2005.07.09 解説「瓢箪から駒」、知立市文化会館開館五周年記念公演 文楽人形創作オペレッタ「弥次喜多新道中記 池鯉鮒宿祭乃縁」パンフレット、知立市文化会館
- * 2005.09.10 連載「鑑賞力アップ講座・文楽を楽しむ その4 偉大な陰の存在」、『上方芸能』157号、pp.107-111
- * 2005.12.10 連載「同上 その5 偉大な陰の存在」、『上方芸能』158号、pp.106-109
- * 2005.11.03 ~ 13 解説「大阪と人形劇」、大阪国際人形劇フェスティバル2005 プログラム、pp.7

プロデュース活動

- * 2005.03.26 企画・監修「モダンダンスと文楽人形 恋人形」、武豊市市民会館
- * 2005.06.04 企画・監修「文楽イン宝塚」、豊竹呂勢大夫・竹澤宗助・吉田清之助・吉田勘弥他、宝塚ソリオホール
- * 2005.09.27 企画・監修・パネリスト「文楽とパンソリ」、ピッコロシアター

講演・口述活動

- * 2005.02.13 講演「浄瑠璃と人形遣い」、亀岡市市制50周年記念文化財講座、亀岡市文化資料館
- * 2005.03.26 鼎談「能と文楽・義経をめぐる人々 知盛」(河村晴道・豊竹呂勢大夫氏とともに)、大津市伝統芸能館
- * 2005.09.16 パネリスト ポーラ文化映画「手の匠」完成試写会、スタジオ・イマジカ
- * 2005.10.30 コメント「京都文化会議

2005-地球化時代のこころを求めて」、ワークショップ2、京都大学、地球環境学堂三才学林

- * 2005.11.09 講演「文楽の楽しみ」、宝塚市選挙管理委員会啓蒙講座、宝塚市西公民館
- * 2005.11.21 講演・司会「文楽を楽しむ 歴史大作を気軽に」、ジバンククラブ
- * 2005.11.22 報告・討議「日本伝統音楽を語る」、日文研・伝統文化芸術総合研究プロジェクト シンポジウム、国際日本文化研究センター
- * 2005.11.23 製作指導等『アクアプロジェクト 竹の音具を作る』、京都市立芸術大学学生会館
- * 2005.11.24 コメント出演「伝統芸能の字幕サービス」、『VOICE』、毎日放送TV
- * 2006.01.10 コメント取材「今時の子供風景」、日本経済新聞
- * 2006.01.27 / 31 講師「日本の伝統芸能 概説 継承と展開 狂言と文楽」、アジアクルーズ、パシフィック・ビ・ナス

講義・講座活動

- * 2005.05.25 知立市文化会館シアターカレッジ 講師「伝統芸能 日本伝統芸能史概論」
- * 2005.10.31 国立教育政策研究所 委嘱授業 講師・司会「義太夫節の構造と実演(実演 豊竹呂勢大夫・野澤喜一朗氏)」、大阪府立東住吉高校芸能文化科
- * 2005.07.05 ~ 07 人形劇パベットアーク特別講座 講師「文楽」、香川県東かがわ市とらまる人形劇研究所

- * 2005.08.05 ~ 06 放送大学面接授業
講師「文楽の歴史と隠された構造」、放
送大学大阪学習センター
- * 2005.10.12 知立市文化会館シアター
カレッジ 講師「伝統芸能 継承と
展開 能・浄瑠璃の「俊寛」を例に」
- * 2005.10.25 京都造形芸術大学 講師
「舞台芸術論 ・日本芸能史 文楽人
形遣いの身体動作」(吉田和生・和右・
玉響氏と)

調査・取材活動

- * 2005.04.15 竹本綱大夫師 聞き取り
取材
- * 2005.08.20 杉本一男氏(大道具「大
阪舞台株式会社」社長)・向山正家氏
(大道具 上方背景画家) 聞き取り取
材

学内活動

- * 将来構想委員会財政部会

対外活動

- * 日本万国博覧会記念基金事業事後評価
等検討委員
- * なにわ芸術祭「新進舞踊家競演会」審
査員
- * 京都大学地球環境学堂三才学林 運営
懇話会委員

田井 竜一

著作活動

- * 2005.06 共編著書、植木行宣・田井竜
一編『都市の祭礼 山・鉾・屋台と囃
子』、京都市立芸術大学日本伝統音楽
研究センター研究叢書1、東京、岩田

書院

- * 2005.06 論文「『祇園囃子』の系譜序
論」、植木行宣・田井竜一編『都市の祭
礼 山・鉾・屋台と囃子』、京都市立
芸術大学日本伝統音楽研究センター研
究叢書1、東京、岩田書院、pp.79-103
(増田雄との共同執筆)
- * 2005.06 論文「水口曳山囃子の成立と
展開」、植木行宣・田井竜一編『都市の
祭礼 山・鉾・屋台と囃子』、京都市
立芸術大学日本伝統音楽研究センター
研究叢書1、東京、岩田書院、pp.253-
291
- * 2005.03.31 調査報告「京都祇園祭り
菊水鉾の囃子」、『日本伝統音楽研究』
第2号、pp.79-102、(増田雄との共同執
筆)
- * 2005.08.20 調査報告「曳山囃子」、「1
月の民俗芸能：朝日のオコナイ」、「2
月の民俗芸能：落川のオコナイ」、三重
県教育委員会・滋賀県教育委員会報告
書編集、三隅治雄・大島暁雄・吉田純
子編『近畿地方の民俗芸能 1 三重・
滋賀』、日本の民俗芸能文化調査報告書
集成 12、東京、海路書房、pp.395-423、
497-502、515-520
- * 2005.06 解題「あとがき 解題にかえ
て」、植木行宣・田井竜一編『都市の
祭礼 山・鉾・屋台と囃子』、京都市
立芸術大学日本伝統音楽研究センター
研究叢書1、東京、岩田書院、pp.459-
471
- * 2006.01.31 事典項目「オノマトペ：
オノマトペと音表象」、「楽器言葉」、
「口頭伝承」、音の百科事典編集委員会
編『音の百科事典』、東京、丸善株式会
社、pp.129、288-289、426-428
- * 2005.03 討論参加、藤井知昭責任編集

『中部高等学術研究所共同研究会 アジアにおける文化クラスター（ ）時代認識の変容』、Chubu Institute for Advanced Studies、Studies Forum Series 34、愛知、中部高等学術研究所

- * 2005.03.31 エッセイ「山・鉾・屋台の祭りの囃子をめぐる新しい動き」、『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所報』第6号、pp.26-28

口述活動

- * 2005.07.14 研究発表「京都 祇園囃子の特質について」、京都市民俗学談話会第193回例会、2005年7月14日（木）、京都コンソーシアム第2会議室
- * 2005.08.26 研究発表「『水口囃子』にみる芸能の戦略」、人文・社会科学振興プロジェクト研究、研究領域「現代社会における言語・芸術・芸能表現の意義と可能性について研究する領域」、プロジェクト研究「伝統と越境 とどまる力と越え行く流れのインタラクシオン」、研究グループ「伝統から創造へ」、2005年度第4回共同研究会、2005年8月26日（土）、聖徳大学2号館2301教室
- * 2005.11.26 研究発表「『水口囃子』にみる芸能の戦略』の顛末」、人文・社会科学振興プロジェクト研究、研究領域「現代社会における言語・芸術・芸能表現の意義と可能性について研究する領域」、プロジェクト研究「伝統と越境 とどまる力と越え行く流れのインタラクシオン」、研究グループ「伝統から創造へ」、2005年度第6回共同研究会、2005年11月26日（土）、聖徳大学8号館8716教室

放送出演

- * 2005.07.01 「第14回 祇園祭 祇園囃子」(戸田順子との対談形式)、『京都検定!なるほど研究所』、KBS 京都ラジオ、2005年7月1日（金）、14時～14時45分
- * 2005.07.15 「祇園囃子」(村上祐子との対談形式)、『歌のない歌謡曲』、KBS 京都ラジオ、2005年7月15日（土）、6時15分～6時30分

企画

- * 2005.05.14 企画・司会・進行「祇園囃子の世界」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成17年度第1回公開講座、2005年5月14日（土）、14時～16時、京都芸術センター フリースペース、京都市立芸術大学主催、京都芸術センター共催

調査・取材活動

- * 継続中 京都 祇園祭り囃子調査、桂地蔵前六斎念仏調査、石取り祭り調査

学内活動

- * 将来構想委員会教育研究理念・計画部 会部会員
- * 将来構想委員会公立大学法人問題調査研究会委員

対外活動

- * 京都ノートルダム女子大学人間文化学部非常勤講師（2005.04～09）
- * 香川大学教育学部非常勤講師（2005.12～2006.03、集中講義）
- * (社)東洋音楽学会理事、機関誌編集委員会委員、改革検討委員会委員
- * 日本音楽学会関西支部委員

- * 日本ポピュラー音楽学会監事
- * A member of the editorial Board, *Perfect Beat: The Pacific Journal of Research into Contemporary Music and Popular Culture*
- * 国立民族学博物館共同研究員
- * 中部高等学術研究所共同研究員
- * 日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究共同研究員
- * 春日神社の石取祭調査団員（桑名市教育委員会）
- * 所属学会：（社）東洋音楽学会、日本オセアニア学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会、日本民族学会、民族藝術学会、International Council for Traditional Music, Society for Ethnomusicology

竹内 有一

著作活動

- * 2006.03.31 研究ノート「初世文字太夫正本の刊行と曲節譜」、『日本伝統音楽研究』（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要）第3号、pp.31-40
- * 2005.12.15 共著『伝統芸能シリーズ 日本舞踊曲集成3 素踊り・歌舞伎舞踊曲補遺編』（別冊演劇界）、東京、演劇出版社
- * 2005.08.21 解説「常磐津節の特徴・常磐津創流から250余年」他、京都芸術センター伝統芸術創造プログラム「継ぐこと・伝えること30 座敷で魅せる 常磐津」、京都芸術センター
- * 2005.05.15 資料・投影「長唄越後獅子の名演を聴く 西洋音楽における異文化受容との関わり」、明倫レコード倶楽部 其の十二 第一部、京都芸術

センター

- * 2005.10.30 資料「指導事例」、深見友紀子「ネットワーク型学習コンテンツの現状と課題 教育情報ナショナルセンターが提供する日本音楽関連素材の分析を通じて」、日本音楽教育学会第36回全国大会研究発表H、琉球大学
- * 2006.01.14 資料「『かつぼれ』再考 ルーツと伝承の整理を中心に」、日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究会「近代日本における音楽・芸能の再検討」

口述活動

- * 2006.01.14 研究発表「『かつぼれ』再考 ルーツと伝承の整理を中心に」、日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究会「近代日本における音楽・芸能の再検討」
- * 2005.05.08 調査報告「歌舞伎劇場が西洋楽劇の受容に果たした役割 明治12年新富座の英国人」、第14回洋楽流入史研究会
- * 2005.05.15 解説「長唄越後獅子の名演を聴く 西洋音楽における異文化受容との関わり」、明倫レコード倶楽部 其の十二 第一部、京都芸術センター
- * 2005.08.21 司会「常磐津よもやま話」、曲目解説「景清・夕涼み三人生酔」、京都芸術センター伝統芸術創造プログラム「継ぐこと・伝えること30 座敷で魅せる 常磐津」、京都芸術センター
- * 2005.09.27 演目解説、第35回滋賀県芸術文化祭「伝統芸能フェスティバル」、滋賀県立長浜文化芸術会館

プロデュース活動

- * 2005.05.08 第14回洋楽流入史研究会

「京都鴨川から洋楽流入史を考える」
(鴨川をどり見学と座談会「鴨川をどりにみる不易と流行」、研究の動向と課題、史料・文献紹介) 京都先斗町歌舞練場ほか

- * 2005.06.04 第5回近世邦楽研究会(「古典演劇譜本展」閲覧会)、早稲田大学演劇博物館
- * 2005.06.13 近世邦楽研究会分科会(目録作成ミーティング)、上野学園日本音楽資料室
- * 2005.08.21 京都芸術センター伝統芸術創造プログラム「継ぐこと・伝えること30 座敷で魅せる 常磐津」、京都芸術センター

調査・取材活動

- * 2005.06.13、07.04、07.05、2006.02.20、02.21、03.02、03.03 詞章本等の書誌調査およびデータ作成(上野学園日本音楽資料室)
- * 2005.04.09 嵯峨大念仏狂言(清凉寺)
- * 2005.04.15 長浜曳山祭
- * 2005.04.27 道成寺会式(道成寺)
- * 2005.06.25 知恩院・萬福寺の声明(南座)
- * 2005.07.14-18 名古屋女流歌舞伎公演(名古屋市芸術創造センター)
- * 2005.07.24 祇園祭花傘巡行・舞踊奉納(八坂神社)
- * 2005.08.01 比叡山薪歌舞伎
- * 2005.08.23 関西常磐津協会演奏会(国立文楽劇場)
- * 2005.10.08-09 長崎くんち
- * 2005.11.13 空也堂念仏踊(光勝寺)
- * 2005.11.19 特別展「浮世絵の楽器たち」(太田記念美術館)

演奏活動

- * 2005.08.21 京都芸術センター伝統芸術創造プログラム「継ぐこと・伝えること30 座敷で魅せる 常磐津」、常磐津「聞茲姿八景～景清」「夕涼み三人生酔」の浄瑠璃演奏(浄瑠璃:常磐津都代太夫・若音太夫、三味線:常磐津都喜蔵・都史) 京都芸術センター
- * 2005.07.16-18 名古屋女流歌舞伎公演、常磐津「紅葉狩」他の浄瑠璃演奏、名古屋市芸術創造センター
- * 2005.08.27 美しき伝統の男達「舞・時の華」、常磐津「来宵蜘蛛線」他の浄瑠璃演奏、梅田芸術劇場
- * 2005.10 第46回宝塚舞踊会(CS放送「タカラヅカ・スカイ・ステージ」)、常磐津「独楽」他の浄瑠璃演奏、宝塚大劇場
- * 2005.12 南座顔見世大歌舞伎、常磐津「三人形」の浄瑠璃演奏、京都南座

学内活動

- * 国際会議委員会、自己点検・評価委員会、附属図書館運営委員会、全学広報委員会、情報管理委員会

対外活動

- * 上野学園日本音楽資料室共同研究員
- * 京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師(日本音楽史)
- * 京都大学人文科学研究所岡田研究室主催勉強会「楽器演奏におけるテクナーとテクノロジー」への参加
- * 楽劇学会 編集委員
- * 東洋音楽学会、近世文学会、藝能史研究会、歌舞伎学会、日本音楽学会、国際浮世絵学会、洋学史研究会、長野郷土史研究会 各会員

- * 常磐津協会 正会員
- * 洋楽流入史研究会 事務・ホームページ管理・メール会報発行担当
- * 近世邦楽研究会 幹事

藤田 隆則

著作活動

- * 2005.09 共著論文「民俗芸能の継承における身体資源の再配分-西浦田楽からの試論-」『文化人類学』70巻2号(2005年) pp.182-205(菅原和孝、細馬宏通との共著)
- * 2006.01 レポート「無題(東洋音楽学会西日本支部第225回定例研究会の内容を報告する記事)」『(社)東洋音楽学会西日本支部 支部だより』第54号、pp.2-4
- * 2006.03 単著単行本『能の地拍子研究文献目録』科学研究費基盤研究C(課題番号15520099)研究成果報告書、170pp.
- * 2006.03 単著論文「能の地拍子「工学」-その系譜と思想-」『日本伝統音楽研究』(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要)第3号、pp.5-30

口述活動

- * 2005.05.14 研究発表「能楽と中世の時間構造」、国際日本文化研究センターシンポジウム「日本音楽における時間性 その美学的概念や音楽語法に関する技術の様相」、国際日本文化研究センター第4共同研究室
- * 2005.06.25 研究発表「クセ舞(クセ)の拍節上の特徴」、共同研究「祇園囃子の源流に関する研究」第3回研究会、

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室2

- * 2005.09.10 研究発表「音楽学からの提言」、日本音楽教育学会第8回音楽教育ゼミナール(妙高ゼミナール)2005、ラウンドテーブル12、新潟県妙高市赤倉温泉「ホテル大丸」
- * 2005.11.12 研究発表「音楽学的知識の伝達ルート」、東洋音楽学会西日本支部第226回定例研究会、パネル「音楽学の知識を伝える 思想的背景と実践」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1
- * 2005.11.23 内容解説「闇への道行(非公開ワークショップ)」、京都市立芸術大学アクアプロジェクト2005、京都市立芸術大学学生会館交流室
- * 2005.12.03 講義と解説「能におけるシテの歩行」、能楽鑑賞入門 芸術ことはじめ(vol.5 能楽)、京都芸術センター
- * 2005.12.10 講義と実演指導「軌跡を知る、軌跡を歩む」、能楽鑑賞入門 芸術ことはじめ(vol.5 能楽)、京都芸術センター
- * 2005.12.17 研究発表「民俗芸能、ルーティーン、観客参加」、特定領域研究「文化資源の生成と利用」(山下晋司代表)2005年度第23回研究会、広島大学東千田キャンパス304号室
- * 2005.12.21 内容解説「第2部(上演)」、能楽学会第5回能楽フォーラム「能楽の部分演奏を考える その歴史と現在」、大阪市、大槻能楽堂
- * 2006.01.14 研究発表「西浦観音祭における分業と書記」、特定領域研究「身体資源の構築と配分における生態、象徴、医療の相互連関」(菅原和孝代表)

2005 年度第 4 回研究会、京大会館

- * 2006.02.04 講演「平家を伝える音と声-語りと謡の伝統」、上原まり琵琶語りの世界関連講座、伊丹市、ラスタホール講座室
- * 2006.02.22 研究発表「民俗芸能をとらまえる 芸能史、音楽学、文化人類学、認知科学」第 5 回学術フロンティア文化人類学分野講演会、神戸学院大学
- * 2005.03.29 内容解説「第 2 部 舞事の構造」、能楽学会第 6 回能楽フォーラム「舞事の諸相 その歴史と現在」、大阪市、大槻能楽堂

プロデュース活動

- * 2005.11.23 企画・実施（共同）「闇のレッスン」、京都市立芸術大学アクアプロジェクト 2005、京都市立芸術大学学生会館交流室 / アクアカフェ / 神宮裏池
- * 2005.12.03, 12.10, 12.11 企画・実施「能楽鑑賞入門-芸術ことはじめ (vol. 5 能楽)」、京都芸術センター
- * 2005.12.21 企画・実施（共同）能楽学会第 5 回能楽フォーラム「能楽の部分演奏を考える その歴史と現在」、大阪市、大槻能楽堂
- * 2005.03.29 企画・実施（共同）能楽学会第 6 回能楽フォーラム「舞事の諸相 その歴史と現在」、大阪市、大槻能楽堂

調査・取材活動

- * 2006.02.10-02.16 静岡県浜松市水窪町奥領家における観音祭の調査（特定領域研究「身体資源の構築と配分における生態、象徴、医療の相互連関」の一

環）

学内活動

- * 将来構想委員会財政部会部会員

対外活動

- * 日本音楽学会関西支部委員
- * (社) 東洋音楽学会理事、機関誌編集委員会委員
- * 大阪国際大学人間科学部非常勤講師 (2005.04-2006.03)
- * 大阪大学文学部非常勤講師 (2005.04-2005.09)
- * 神戸女学院大学音楽学部非常勤講師 (2005.09-2006.03)
- * 所属学会：日本音楽学会、楽劇学会、(社) 東洋音楽学会、日本認知科学会、能楽学会、International Council for Traditional Music, Society for Ethnomusicology

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 概要 2005

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指します。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に呈している日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものである、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を解明し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

センターの活動

資料の収集・整理・保存

文献資料(図書、逐次刊行物、古文獻、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む)

音響映像資料

楽器資料

絵画資料

データベースなどの電子資料

日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究

専任研究員による個人研究

特別研究員による特定のテーマの研究

研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究

日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究

国内外の多くの研究者・演奏家の参加・

協力を得て、学際的・国際的な視野で、

センターが行う共同研究

センターが外部と共同して行う調査研究

活動成果の社会への提供

公開講座・セミナー等の開催

紀要・所報・資料集などの出版

インターネットなど電子媒体による公開

研究の対象

伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみ
すえる

明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承
古代

祭祀歌謡と芸能(楽器等の考古学的遺物
を含む)

上代・中古

仏教音楽(声明等)

宮廷の儀礼・宴遊音楽(雅楽等)

中世

仏教芸能(琵琶、雑芸、尺八等)

武家社会の芸能(能・狂言等)

流行歌謡(今様、中世小歌等)

近世

外来音楽(切支丹音楽、琴楽、明清楽)

劇場音楽(義太夫節・常磐津節等の浄瑠
璃、長唄、歌舞伎囃子等)

非劇場音楽(地歌箏曲、三味線音楽、琵琶
楽、尺八等)

流行歌謡(小唄、端唄等)

近代社会での伝統音楽の展開をみすえる
伝統音楽の発展とその可能性に関する事
象の研究

伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究
広い視野で生活の音楽をみすえる

民間伝承と日本関連諸地域及び先住民族
の音楽・芸能の研究

生活における音楽・芸能(わらべうた・
民謡、祭祀音楽等の民俗芸能)の研究

専任研究員

所長: 吉川周平(日本民俗音楽・舞踊学)

「日本における神の表現の研究」

「民俗芸能のかたちと意味の研究」

教授: 久保田敏子(日本音楽史学)

「邦楽の歴史的音源に関する研究」

「地歌・箏曲の作品研究」

教授: 後藤静夫(芸能史・文化史)

「人形浄瑠璃・文楽の実態研究」

「芸能の伝承研究」

助教授: 田井竜一(民族音楽学・日本音楽
芸能論)

「山・鉦・屋台の囃子の比較研究」

「六斎念仏の研究」

助教授: 竹内有一(日本音楽史学)

「詞章本とその曲節譜の研究」

「伝記資料に関する基礎的調査」

助教授: 藤田隆則(民族音楽学・比較音楽
学)

「古典音楽伝授形式の比較研究」
「能・狂言の演出史」

非常勤講師

特別研究員

小野真「法会の宗教性 仏教的ヒエロファニーの探求」
廣井榮子「豊竹呂昇研究 音楽活動における「結節点」としての演奏会とレコード」

三木俊治「日本伝統音楽研究センターにおける田邊コレクション楽器の研究」
森田稔山「中尾都山の地歌尺八手付けの研究」

情報管理員

東正子「ネットワーク管理とホームページ管理」

事務室

事務長：加納則章 課長補佐：青木静夫
係員：才田典子

学芸員・研究補助員

学芸員：川和田晶子
研究補助員：池内美絵、伊藤志野、齋藤尚

プロジェクト研究・共同研究

プロジェクト研究

「教育現場における日本音楽」

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：井口はる菜、伊野義博、加藤富美子、薦田治子、澤田篤子、田井竜一、竹内有一、塚原康子、月溪恒子、永原恵三、樋口昭、藤田隆則、水野信男、茂手木潔子

「近代日本における音楽・芸能の再検討」

研究代表者：後藤静夫

共同研究員：今田健太郎、上田学、奥中康人、竹内有一、寺田真由美、土居郁雄、中川桂、中嶋謙昌、畑中小百合、廣井榮子、古川綾子、細田明宏、真鍋昌賢、横田洋

共同研究

「日本伝統音楽に関する歴史的音源の発掘と資料化」

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：亀村正章、川向勝祥、黒河内茂、後藤静夫、田井竜一、竹内有一、中井猛、林喜代弘
「祇園囃子の源流に関する研究」

研究代表者：田井竜一

共同研究員：安達啓子、入江宣子、岩井正浩、植木行宣、垣東敏博、後藤静夫、永原恵三、西岡陽子、樋口昭、福原敏

男、増田雄、米田実

「詞章本とその出版に関する研究」

研究代表者：竹内有一

共同研究員：井口はる菜、小野恭靖、久保田敏子、後藤静夫、龍城千与枝、谷垣内和子、配川美加、松岡亮、山崎泉、山根陸宏、吉野雪子、渡邊浩子

委託研究

「田邊尚雄氏旧蔵 SP 音盤の調査とデジタル化」亀村正章

「相愛大学蔵平野健次氏旧蔵 SP 音盤の整理とデジタル化」川向勝祥

設立の経緯

平成3年6月 世界文化自由都市推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を訴える

平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及

平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される

平成8年10月 京都市が伝統音楽調査会（会長：廣瀬量平名誉教授）に、伝統音楽部門の調査を委託する

平成8年12月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる

平成9年4月 実施設計費及び地質調査経費予算措置

平成10年4月 施設建設費予算措置

平成10年10月 施設建設着工（工期17ヶ月）

平成11年9月 日本伝統音楽研究センター設立準備室を設置する（室長：廣瀬量平名誉教授）

平成12年2月 新研究棟竣工

平成12年4月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設

平成12年12月 京都市立芸術大学新研究棟披露式挙行

施設

新研究棟6～8階

6階 センター所長室、事務室、会議室、資料室、資料管理室、個人研究室

7階 合同研究室(2)、楽器庫、貴重資料庫

8階 個人研究室(5)、研究員室(2)、視聴覚編集室、研修室(2)

（センター総面積約1,500m²）

Research Centre for Japanese Traditional Music Kyoto City University of Arts 2005

The Research Centre for Japanese Traditional Music was founded at the Kyoto City University of Arts on April 1, 2000, with the aim of undertaking comprehensive research on traditional music and performing arts within the society and culture of Japan.

In the more than one hundred years since the Meiji Restoration of 1868, Japan has followed a path of modernization and Westernization, which has become more pronounced in the fifty something years since the end of World War II. We have reached a time ripe for the reconsideration of Japan's traditional culture, and the development of new approaches to it. The founding of the Research Centre for Japanese Traditional Music at the Kyoto City University of Arts is of particular significance in view of the fact that Kyoto has long been the living centre of Japan's traditional culture.

Kyoto is rich in physical evidence of its traditional culture, what we may term a 'visual' heritage; with the establishment of this new body, however, the city authorities have demonstrated a deep respect towards its 'aural' heritage. As a new 'centre' for research on Japan's traditional music, the Research Centre aims to make a broad and significant contribution to the field of Japanese music, by means of sharing and exchanging information and the results of researches with researchers, other research establishments and performers, not only within Japan but throughout the world.

The Research Centre for Japanese Traditional Music thus hopes to link the past with the present through a unique range of activities in research and creation, within the wider context of Japan's traditional culture.

Activities of the Research Centre

A. Collecting, ordering, and preserving research materials of relevance to the study of Japan's traditional music and performing arts:

(1) Documentary materials (books, periodicals, old documentary sources, copied and non-printed materials including microfilm, etc.)

(2) Audio-visual materials

(3) Instruments and related materials

(4) Pictorial materials

(5) Materials in electronic form, such as existing databases and the like

B. Individual research on Japan's traditional music and performing arts:

(1) Research by individual members of the full-time staff

(2) Research on particular themes by scholars employed as part-time research fellows

(3) Research commissioned from scholars outside of the Research Centre on their fields of speciality

C. Team research on Japan's traditional music and performing arts:

(1) Team research undertaken from an interdisciplinary and international perspective by research teams based at the Research Centre, formed for that purpose with the cooperation and participation of researchers and performers from both Japan and overseas

(2) Surveys in collaboration with other bodies and/or individuals

D. Bringing the results of research to a wider audience through the following activities:

(1) Public events including lecture series, seminars, workshops, and lecture-demonstrations

(2) Publications including a regular newsletter, an annual bulletin, and collections of research materials

(3) Electronic publications such as databases available for use online

Fields of Research

The research fields of the Research Centre encompass the past, present and future of Japan's traditional music:

(1) The development and transmission of music prior to the Meiji Restoration of 1868

Prehistoric times

Religious song and performing arts (including archaeological study of surviving examples of instruments, etc.)

Ancient times

Buddhist music (*shoomyoo*, etc.)

Ceremonial and entertainment music of the court (*gagaku*, etc.)

Medieval times

Buddhist performing arts (*biwa*-accompanied narrative, *zoogei*, *shakuhachi*, etc.)

Performing arts of the warrior class (*noo*, *kyoogen*, etc.)

Popular song (*imayoo*, medieval *kouta*, etc.)

Pre-modern times

Music from foreign sources (so-called 'Christian' music, Chinese *qin* music in Japan, *minshingaku*)

Theatrical music (*gidayuu-bushi*, other types of *jooruri* including *tokiwazu-bushi*, etc., *nagauta*, *hayashi* music in *kabuki*, etc.)

Non-theatrical music (*jiuta sookyoku*, other *shamisen* genres, *biwa*-accompanied vocal genres, *shakuhachi*, etc.)

Popular song (*kouta*, *hauta*, etc.)

(2) Developments in traditional music since the Meiji Restoration

The development of traditional music and its possibilities, including composition

The reception of traditional music and the place of traditional music in education

(3) Music in daily life, in the broadest terms

Folk transmission and the music and performing arts of areas related to Japan and of its indigenous minorities

Music and the performing arts in daily life (children's song and folk song; folk performing arts including festival music)

Full-Time Research Staff

KIKKAWA Shuuhei (Director; Japanese folk music and dance)

Study of visual representation of Japanese deities

Study of form and meaning in Japanese traditional performing arts

GOTOO Shizuo (Professor; Performing arts history, Cultural history)

Research on the present status of *ningyoo-jooruri*, *bunraku*

Research on the transmission of the traditional performing arts

KUBOTA Satoko (Professor; Historiography of Japanese music)

Research on historic recordings of traditional Japanese music

Research on works of the *jiuta* and *sookyoku* repertoires

FUJITA Takanori (Associate Professor; Ethnomusicology, Comparative musicology)

Comparative study on styles of transmission in classical music

Historical research on production and performance of Noh and Kyogen

TAI Ryuuichi (Associate Professor, Ethnomusicology, Japanese performing arts)

Comparative research on the *hayashi* music of festival floats

Research on *rokusai-nenbutsu* music

TAKEUCHI Yuuichi (Associate Professor, Historiography of Japanese music)

Bibliographic research on Japanese vocal texts and written musical symbols

Preliminary research of biographical documents

Part-time Staff

Research Fellows:

HIROI Eiko

Study of TOYOTAKE Roshoo: Recitals and discs as 'juncture' in her art

MIKI Shunji

Research on the Centre's TANABE Hisao collection of musical instruments

MORITA Shuuzan

Study in NAKAO Tozan's *shakuhachi* arrangements for *jiuta*

ONO Makoto

Religious characteristics of Buddhist rituals: exploring Buddhist 'hierophany'

System Administrator:

HIGASHI Masako

Maintenance of the Centre's network and homepage

Administrative Secretariat

Director: KANOO Noriaki

Chief: AOKI Shizuo

Clerical Staff: SAIDA Noriko

Curator and Research Assistants

Curator: KAWAWADA Akiko

Research Assistants: IKEUCHI Yoshie, ITOO Shino, SAITOO Hisashi

Team Research

Major Projects

New perspectives on music and performing art in modern Japan

Project leader : GOTOO Shizuo

Other members: DOI Ikuo, FURUKAWA Ayako, HATANAKA Sayuri, HIROI Eiko, HOSODA Akihiro, IMADA Kentaroo, MANABE Masayoshi, NAKAGAWA Katsura, NAKASHIMA kensuke, OKUNAKA Yasuto, TAKEUCHI Yuuichi, TERADA Mayumi, UEDA Manabu, YOKOTA Hiroshi

The traditional music of Japan in the classroom

Project leader: KUBOTA Satoko

Other members: FUJITA Takanori, HIGUCHI Akira, IGUCHI Haruna, INO Yoshihiro, KATOO Tomiko, KOMODA Haruko, MIZUNO Nobuo, MOTEGI Kiyoko, NAGAHARA Keizoo, SAWADA Atsuko, TAI Ryuichi, TAKEUCHI Yuuichi, TSUKAHARA Yasuko, TSUKITANI Tsuneko

Regular Projects

Research/compilation of historic recordings of Japanese traditional music

Project leader: KUBOTA Satoko

Other members: GOTOO Shizuo, HAYASHI Kiyohiro, KAMEMURA Masaaki, KAWAMUKAI katsuyoshi, KUROKOOCHI Sigeru, NAKAI Takeshi, TAI Ryuichi, TAKEUCHI Yuuichi

Research on the origins of *Gion-bayashi*

Project leader: TAI Ryuichi

Other members: ADACHI Keiko, FUKUHARA Toshio, GOTOO Shizuo, HIGUCHI Akira, IRIE Nobuko, IWAI Masahiro, KAKITOO Toshihiro, MASUDA Takeshi, NAGAHARA Keizoo, NISHIOKA Yooko, UEKI Yukinobu, YONEDA Minoru

Studies of Japanese vocal text collections and their publishing

Project leader: TAKEUCHI Yuuichi

Other members: GOTOO Shizuo, HAIKAWA Mika, IGUCHI Haruna, KUBOTA Satoko,

ONO Mitsuyasu, MATSUOKA Ryoo, TANIGAITO Kazuko, TATSUKI Chiyoie, YAMANE Michihiro, YAMAZAKI Izumi, YOSHINO Yukiko, WATANABE Hiroko

Commissioned Research

Digital archiving of the TANABE Hisao SP collection and its documentation

KAMEMURA Masaaki

Digital archiving of the HIRANO Kenji SP collection and its documentation

KAWAMUKAI Katsuyoshi

History

1991 The need for a new Kyoto centre for research on Japan's traditional music expressed by HIROSE Ryoohi at a planning committee for the development of Kyoto as a City Open to the Free Exchange of World Cultures

1993 Expansion of the Kyoto City University of Arts proposed within the New Master Plan of Kyoto City 1996 Founding of the centre for research on traditional music established within the Kyoto Action Plan for a town full of Vitality, based on the city's Development Plans for Arts and Culture

1997 Budget allocated for planning the new building and surveying the site

1998 Construction begun (completed early 2000)

2000 Commencement of activities (April); opening ceremony (December 2)

Facilities

The Research Centre for Japanese Traditional Music is situated on the 6th to 8th floors of the University's Shinkenkyuutoo (New Research Building), with a total area of approx. 1500m².

6th floor: Director's office, administration, committee meeting room, reference library, materials management room, individual office

7th floor: Seminar rooms (2), instrument storeroom, special collection

8th floor: Individual offices (5), fellows' rooms (2), audio-visual studio, training rooms (2)

編集後記

『所報』の編集に追われていると、今年度もあっという間に過ぎ去ったことを実感します。

今号も、年度末の刊行を第一目標としました。研究センターというところで、いったい誰が何を行っているのか、外部の方々にはなかなか分かりにくい面があるかと思えます。一年間の研究成果や活動報告を、年度末にきっちりとまとめ、伝える。あたり前のことかもしれませんが、そうした小さな積み重ねが、当研究センターへのさらなる理解や協力を賜ることにつながると信じています。

委員の配慮が行き届かず、やむを得ず、掲載を次号におくった原稿もあります。関係各位には深くお詫び申し上げます。(竹内)

編集委員 田井 竜一
竹内 有一

京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター 所報 第7号
2006年3月31日発行
編集・発行人 京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター
吉川 周平
〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6
電話 075-334-2240
FAX 075-334-2241
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>
印刷所 株式会社 田中プリント

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts
13-6 Ooe Kutsukake-choo, Nishikyoo-ku
Kyoto-shi, 610-1197, Japan
Tel +81-75-334-2240
Fax +81-75-334-2241
E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp
<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

